わすれまいぞ
周防灘台風

昭和17年周防灘台風（西割190号線）

黒石校区コミュニティ推進協議会

わすれまいぞ周防灘台風

わすれまいぞ「周防灘台風」の発刊にあたり

黒石校区コミュニティ推進協議会
会長　浅上梧朗
（黒石校区自治会連合会会長）

「大変だー土手が切れたぞー」の叫び声を聞くまもなく濁流が家までおしよせてきた。バタン・バタンと音を立てて畳がめくれ上がった。あわてて家族が手を取り合って天井裏へ避難した。近くから「助けてくれー・・・」との悲鳴が聞こえる。流される馬や牛の断末魔にも聞こえる泣き声。なんの手助けもできずただ見過すしかなかった。

恐怖の夜も明け白々とした夜明けに見えるのは渦巻く濁流に現れている厚南平野であった。台風一過の抜けるような夏の青空の下に水ぶくれの黒々とした水死体、流された家屋、流木の間を血眼で肉親の姿を捜し求める傷ましい情景。そんな地獄絵を見たのが昭和十七年（一九四二年八月二七日）「周防灘台風」でした。

黒石校区コミュニティ推進協議会では、平成十九年度防災教育チャレンジプランの団体指定を受け「わすれまいぞ周防灘台風」を発刊することにしました。六十五年を経過して、ともすれば風化されそうな災害を忘れてはならない。再びこのような無残な悲しい災害に遭遇することのないように、多くの犠牲のあった体験を後世に残すことは体験したものの務めであり、使命であると思います。

記念誌を発刊するにあたって、当時の生々しく、また悲しい体験をお寄せいただいた方々や、当時の写真について貴重なアドバイスをいただいた方、また編集に携わっていただいた方の大変なご努力に対して深甚なる敬意を表しますとともに、この記念誌が後世に語り継がれて歴史として心に残すだけでなく、安心・安全なまちづくりに生かされることが、先人諸先輩の苦難労苦に対して報いることではないかと思います。

平成十九年十二月

黒石校区 自主防災会 結成式

宣　言

わたしたち　黒石校区民は
わたしたち家族と　わたしたちの町を
災害から守るために
ひとり一人が　日頃から地域の安全を考え
相互扶助のできる町を目指し
いざ災害が発生したときは
お互いに　励まし　たすけあい　協力して
自主的に　防災活動を行うことを
ここに宣言します

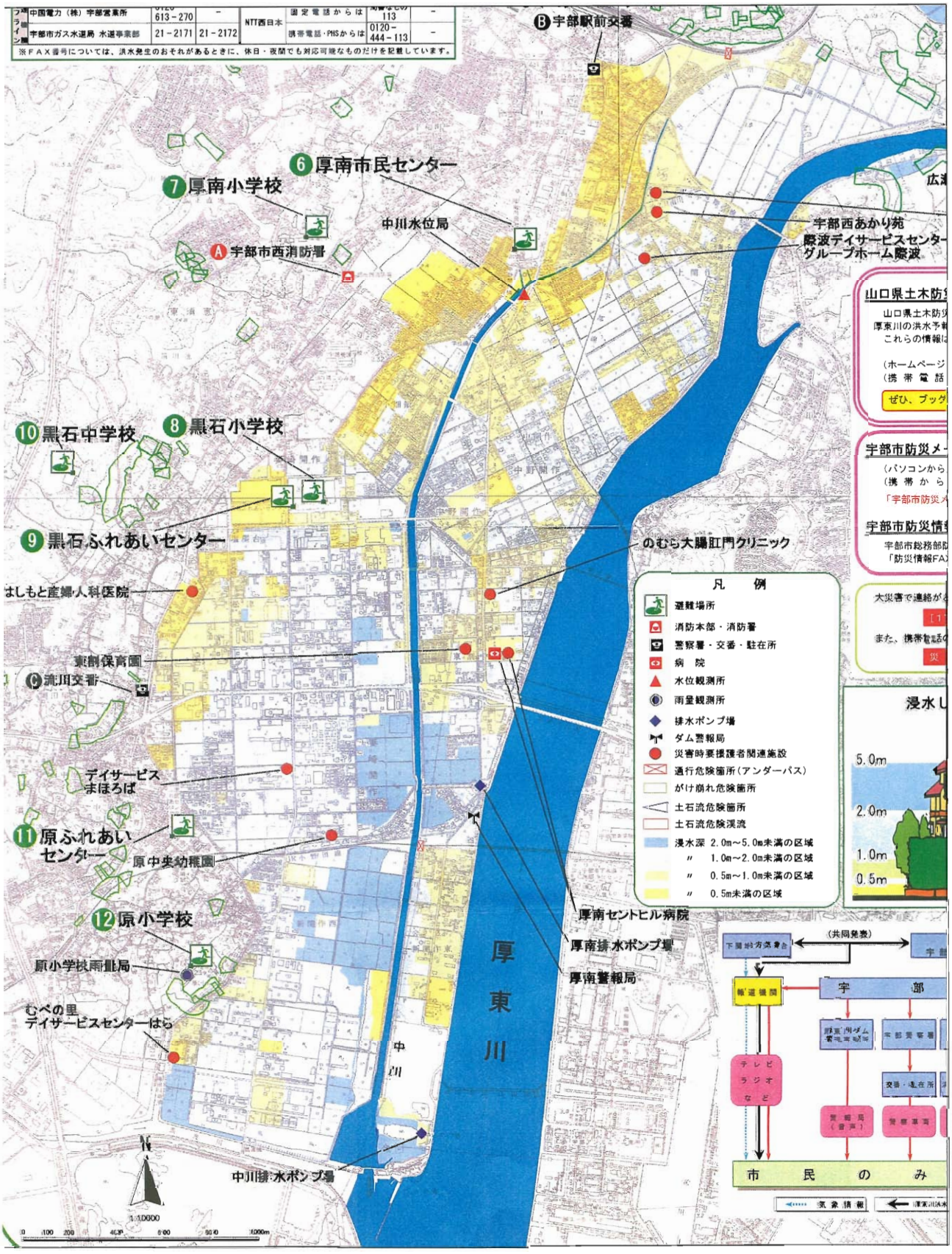
平成十九年八月二十六日

黒石校区自主防災会

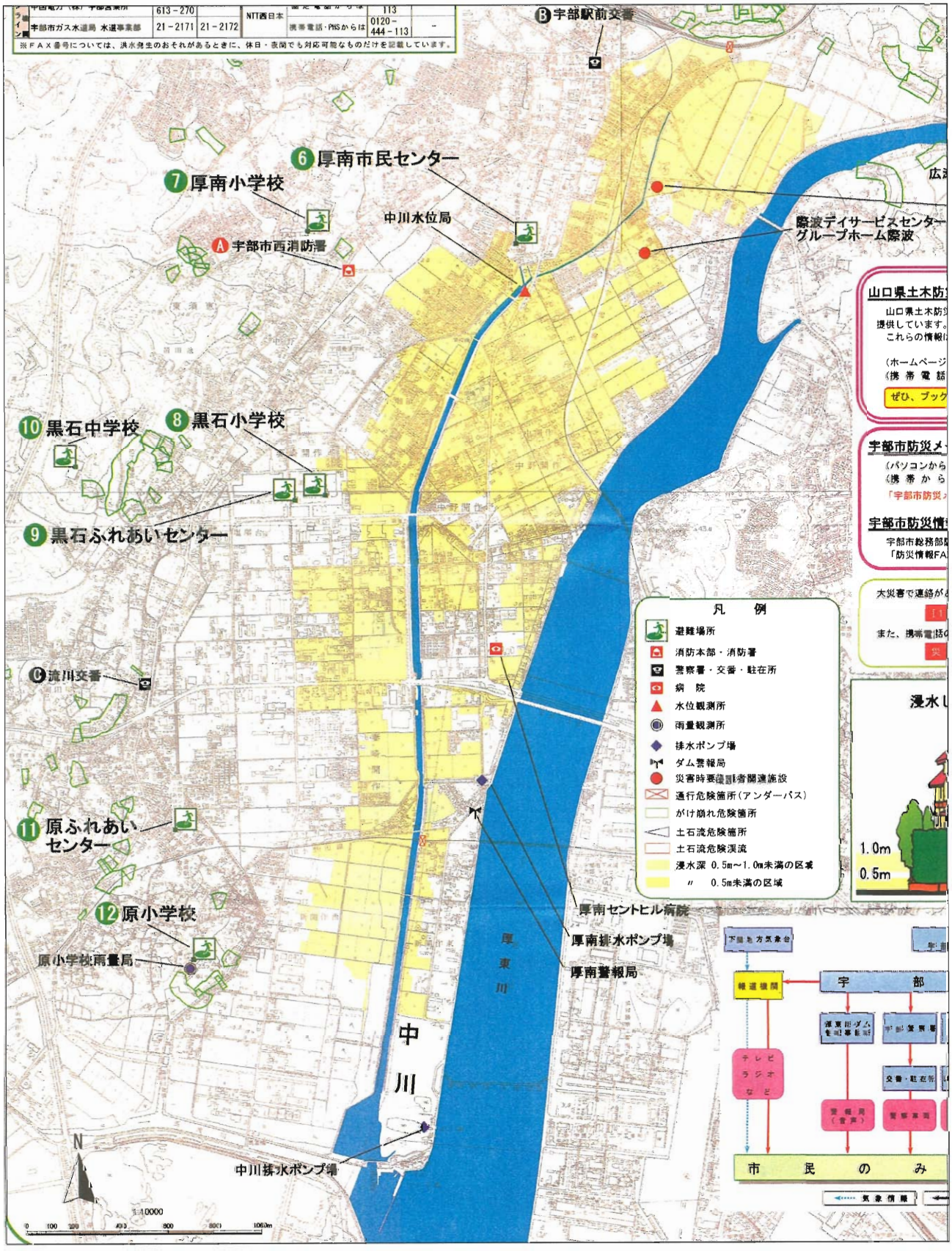
宇部市厚東川洪水避難地図

ライフライン	中国電力（株）宇部営業所	0120-613-270	－	NTT西日本	固定電話からは	局番なしの113	－
	宇部市ガス水道局 水道事業部	21－2171	21－2172		携帯電話・PHSからは	0120－444－113	－

※ＦＡＸ番号については、洪水発生のおそれがあるときに、休日・夜間でも対応可能なものだけを記載しています。



宇部市中川洪水避難地図



目次

表紙

挨拶　黒石校区コミュニティ推進協議会会長　浅上梧朗

宣言

宇部市厚東川洪水避難地図

宇部市中川洪水避難地図

風水害当時の厚南……1

周防灘台風の概要……3

一、気象状況……3

二、被害状況……4

わすれまいぞ周防灘台風…体験談篇…5

風水害の想い出　西割　伊藤務……6

大風水害を顧みて　西割　内田トシ子……8

厚南風水害を想う　中野開作　小西幸一……11

水害に思う　東割　江本帰一……13

失った白い筆箱　東割　大亀恆芳……15

風水害の思い　黒石　堀悦雄……19

風水害の思い出　東割　柳緑……20

八月二十七日の“大変”　黒石　宮本弘……22

恐ろしかった風水害　東割　隅田寿人……25

思い出　東割　山村皎二……28

大風水害を体験して　東割　松永美代子……31

風水害の思いで　中野開作　竹本光昭……33

昭和十七年の風水害に寄せて　東割　木谷定教……36

わすれまいぞ周防灘台風…写真篇…39

災害地『今』と『当時』……40

当時の映像……43

自主防災会結成に向けて……45

自主防災会の結成へ……46

あとがき……53

資料提供紹介……54

風水害当時の厚南

大風水害のあった昭和十七年当時の日本は、満州事変（昭和六年～）・支那事変（昭和十二年～）・大東亜戦争（昭和十六年）へとエスカレートしていった厳しい戦時体制の最中で、国民の生活は「欲しがりません勝つまでは」のスローガンの下に、物資不足を精神面で補わなければならない困難な生活が続いていた。

『あれもない。これも足りない。こんな世の中つまらない。
そんな気持ちでいる人にゃ、新体制はわからない。』

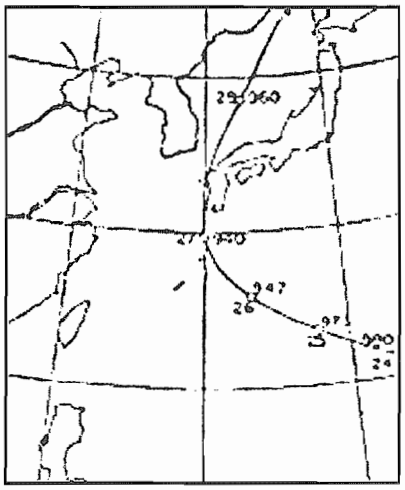
という唄もあったがとにかく戦時体制一色の時代であった。しかし、国民は戦争に勝つことだけを信じ、「一億一心」の号令のもとに私利私欲を捨てた「滅私奉公」の精神に徹し、国―県―市町村―町内会―隣組―各家へと命令どおり動かなければならない軍国主義の時代であったが、義理人情は厚く隣近所・郷土・国家への協力は惜しまなかった。

風水害当時の厚南地区は宇部市に合併した＝昭和十六年（一九四一年）十月＝翌年の厚南村が宇部市厚南区になったばかりで、厚南平野一帯は農家が殆どであった。当時の農業は牛馬で耕す以外は手作業が多く、農家の子どもは貴重な労働力とされ、小学校の高学年になると一人前に扱われた。大抵の家では牛馬の飼料にする草刈ぐらいは学校に行く前の子どもの仕事で「あさまぐさ」と言われていた。そんなに忙しい農家の大黒柱ともいえる青壮年男子は戦時中のことで出征（軍隊に召集）し、不在の家が多かった。

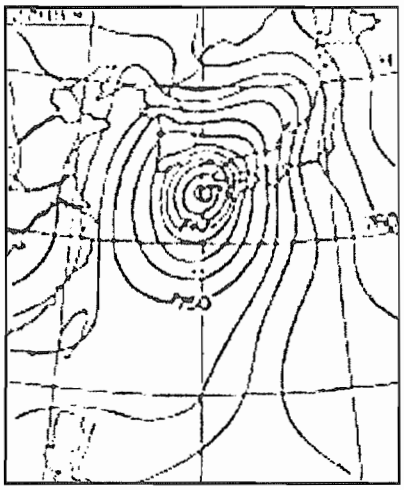
この頃から、宇部市内や近郊の官公庁・各事業所でも男子が軍隊に召集され、人手不足から女性の進出が目覚しくなるとともに、炭鉱や工場の現場には韓国・中国人が目立つようになってきた。また、当時の通勤・通学は厚南地区から宇部市内や小野田位の距離ならば徒歩か自転車の人が多く、交通も不便で荷物運搬の主役は馬車であった。厚南の道路で貨物自動車（トラック）を見ることは珍しく、電話がある家も僅かであった。その上、軍事機密を守るということから新聞・ラジオの情報も少なく、天気予報の伝達は皆無に等しかった。

周防灘台風　昭和 17 年 8 月 26 日
（福岡管区気象台要報資料）

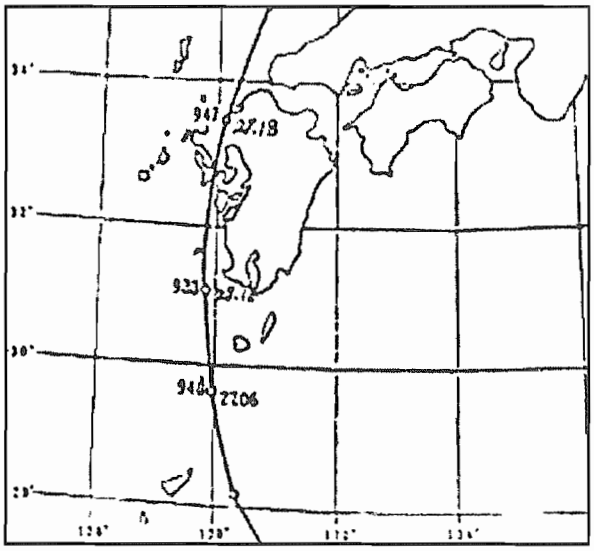
経路図（06時の位置）



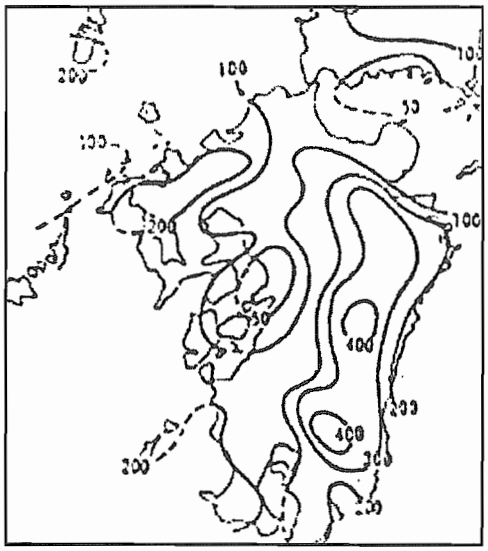
地上天気図



経路図（6時間毎の位置）



雨量分布図 8月25日～8月27日



周防灘台風の概要

一、気象状況

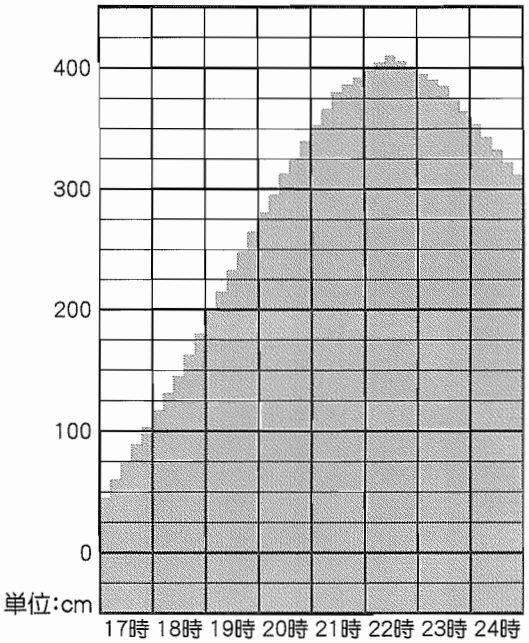
昭和十七年八月二十七日正午鹿児島の西方一〇〇キロメートル位の海上で七〇〇ミリメートル（昭和二十一年から呼称変更で九百三十三ミリバール、平成四年十二月一日から国際単位への切り替えに伴い九三三ヘクトパスカル）の中心示度を持った猛烈な台風は十八時には佐賀県に達し十九時には玄界灘に抜けた。

その後進路を北東にとり二十八日朝には日本海中部に達したが、この台風が山口県のすぐ西側を通り、しかも非常に発達したものであり、その上台風の中心が最も近づいた頃が丁度満潮時刻に当たっていたせいも手伝って各地に高潮、暴風、洪水による被害を出し、その損害は莫大なものであった。

なお、当時下関測候所の記録によれば最大風速三十六・七メートル（二十七日、二十時十分）総降水量四十六・七ミリメートルであった。

宇部港の潮汐

宇部港の潮汐の推算値
1942年8月27日（旧暦7月16日）



証言等による台風の推移

14時頃 暴風警報あり
17時頃 琴川橋北側厚東川の波堤防を越す
18時頃 波が頂上（標高10m）まで届く
19時頃 厚東川大橋の上まで波が洗う
20時頃 厚東川の土手が切れて水が押し寄せる
21時頃 190号線あたりに津波が見える
22時頃 海水が厚南平野を飲み込む
22時30分頃 台風通過　日本海へ去る
24時頃 厚南平野一面大海原 風弱まり潮引き始める

二、被害状況

宇部市の被害は、（宇部戦前史一九三一年以後による）十月十日現在において五八、一〇四、四二七円（現在米価に換算すると約五百八十億円）に達し山口県全体の被害額の十分の一に相当する大被害だった。その内特に厚南平野は満潮時に高潮が加わり、厚東川西側堤防と、小島の西側堤防が決潰し、海水がなだれ込み、悪夢のような夜となったのである。

当時は、太平洋戦争の真っ只中でもあり、人心不安を防ぐためもあったか厚南地区の被害状況は詳細に公表されていないが、厚南地区だけで死者、行方不明者を合わすと二百余名に及び、その惨状は目を覆うべきものがあった。

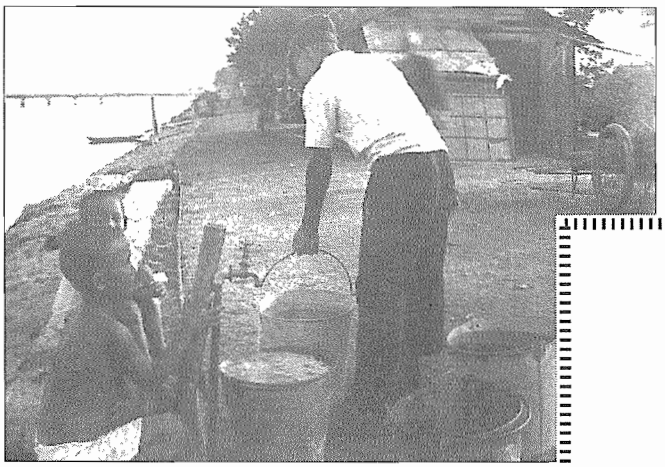
なお、宇部市全体としての被害状況の詳細は別表のごとくであって、周防灘台風前後六十五年を通じても宇部市の台風災害史上最大の被害であった。

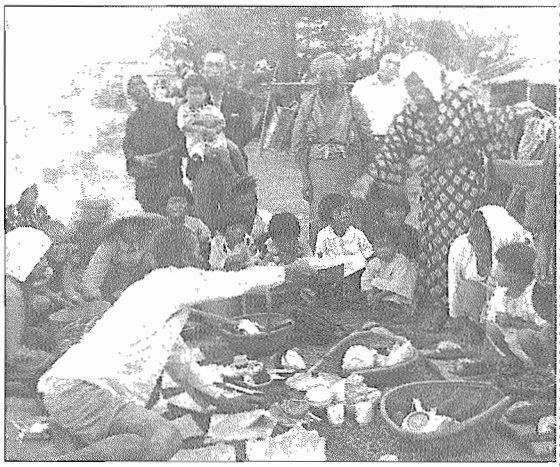
宇部市の被害（宇部戦前史） 昭和17年10月10日現在

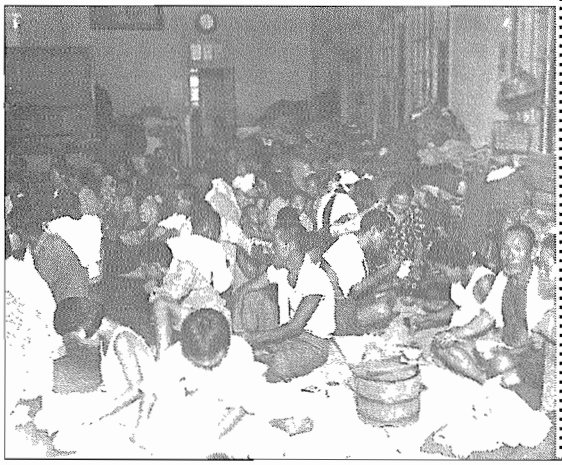
罹災戸数 16,800戸　　罹災人員 84,000人

罹災戸数内訳	流失		472戸
	倒壊		71〃
	半壊		643〃
	床上浸水		5,082〃
	床下浸水		10,201〃
	その他		331〃
死亡者及び負傷者	死亡		232人
	行方不明		65〃
	負傷		118〃
畜産関係（斃死）	牛		25頭
	馬		30〃
水産関係（漁業用船舶）	流失		197隻
	破損		79〃
耕作関係	耕地荒廃面積		220町歩
	潮受堤防決潰		4ケ所
土木関係	道路		10〃
	橋梁		12〃
	河川		4〃
	海岸		2〃
	港湾		3〃
	その他海岸護岸		6〃
工場・鉱山関係	会社・工場		36〃
	炭鉱		12〃
その他	一般船舶	沈没	236隻
		破損	106〃
	市有建物		58ケ所
	神社		9〃
	仏閣		15〃

被害総額 58,104,427円（現在米価換算 約580億円）







わすれまいぞ周防灘台風

…体験談篇…

風水害の想い出

西割　伊藤　務（当時17才）

昭和十七年の厚南風水害は、ここ流川交差点近くの私の家も、襖の把手まで浸水した。一夜明けて家に帰ってみると、家の前の田圃は流木と塵芥の山で前の一九〇号線（当時は産業道路であった）道路には、流れ着いた藁屋根が乗っかっている状態であった。

最初の仕事は遺体探しであったが、私の田圃と屋敷内にはなかった。穂の出揃った稲を押しつぶした流木、塵芥の後片付けには、何日も父の手伝いをさせられた。

当時十七歳の私でしたが、当日の恐ろしさは今でも台風時期には思い出され忘れる事はない。

夕方から猛烈な風で会社帰りの方が宇部方面から歩くというより吹き飛ばされるという感じで、屋根瓦や小石の飛ぶ中を小野田方面に帰宅されていた。

その風の強さと、危険な為外に出ることも出来ず、今にも倒壊しそうな家の中で布団をかぶり、せめて頭だけは材木の下敷きにならぬよう息が出来ますようにと祈る気持ちで、丈夫な文机の下に頭を入れ、耳を塞いでマンジリともしなかった。

そうこうするうちに母が「土間に水が来た！」と、大声で叫んだので飛び起きた。土間の水は見る見るうちに水量を増し、母と一緒に裏戸を引き開け、濁水をかき分けるようにして垣根を越え、梅田川土手に辿りついたが、梅田川は水が逆流し、その恐ろしさに橋を渡ることが出来なかった。そこで川土手を黒石方面に走ることにした。現在の山本整形外科前の橋をやっとの思いで渡り、叔母である白石氏宅（郁夫氏）に避難した。

そのころは幾分風が弱くなったなと感じた。ラジオも聞くことができず、沖の方（低地区）であった災害の甚

大さは、夜が明けるまで分からなかった。水は上流から流れるもので、まさか下流から海水が押し寄せるとは夢にも思わなかった。

翌日から子どもの私にも炊き出しの手伝いである。男という事で米俵の運搬をすることになった。今でも不思議な力が出たものと思い出されるが、それまで米俵（六〇キロ）を一人で肩に担ぐことが出来なかったのに、その時は一人前にそれを担ぎ運搬したことでした。後日、米俵を担いで見ようと何度も挑戦してみたがだめだった。

西割産業道路（現 190 号線）仮堤防工事

大風水害を顧みて

西割　内田　トシ子　（当時17才）

思えば昭和十七年八月二十七日は、早朝より異様な空模様でしたが、午後になり風は次第に激しく、日暮れ頃には風に雨がまじる状況でした。ところが午後九時ごろ外でゴーッと異様な物音がしたので、様子を見に母が外に出たところ、新開作土手町（ＪＲ小野田線沿い）まで一望することができ、青田（稲田）、蓮の田園が海と化し、怒涛の如く流れてくる状を見て、私達に早く外に出て避難（岡田屋の方へ）するようにと叫びました。

妹と外に出た時は、腰のあたりまで水位があり、どうしようかと思う間もなく増水し、家の西側まで行った所で既に水位は胸のあたりに達し、歩くことすらできなくなりました。

ちょうどイチジクの大木がありましたので、皆んなでその枝を掴み木によじ登りました。水が軒に達した時、父が屋根に上がって瓦を除けて私達を引き上げてくれました。親子四人は棟木にしがみつき、そうこうする内に屋根の中腹まで水がきました。本当に生きた心地もなく、ただ呆然と水面を見つめるのみでした。

風雨も弱まり時々お月様の光が見えるようになり、一安心した途端、土手町の方より家や崩壊した家の柱や牛馬が流れて来るのが目に入りましたが、恐怖のあまり声も出ません。

父の「絶対に手を離すな」という大声で我れに返り、前方を見ますと大きな藁屋が私の家の方に向かって流れて来ています。どうする事も出来ず我が家にドカーンと突き当たって我が家は浮き上がり、ひと廻りして流れ出しました。途中電線が行く手をさえぎり避けるのに苦労しました。又、漂流途中、牛馬が五、六頭助けを求めて力を振りしぼり一生懸命泳いで来るのです。助けてやりたくても家に上がって来れば我々の命も保障されません。

複雑な気持ちで、ただ見つめるだけでした。その内、牛馬も力尽きて濁流に呑まれたのか、一頭、又一頭と姿が見えなくなったり、目前で水の怖さをまざまざと見せつけられ、ショックで一瞬我を忘れ気が遠くなりました。地獄絵さながらの悲惨なこの光景は、言語に絶するものでありました。

堤防が決壊し、漂流し始めて約三時間位と思いますが、小畑領の中央あたりで引き潮になって水位が下がった為か、家が流れなくなり田圃の中に漂着したのです。その時は雨も降り止んでいました。瞬間「助かった」と、実感した途端に全身の力が抜け腰を落とし、そのまま立ち上がることができませんでした。

ふと母の腕を見ると、血を流し大怪我をしています。漂流中、いろいろな物が流れてきて突き当たりそうになるのを防ぐ内に、ガラスで腕を切った様です。私の着ていた洋服を切り裂き、その布で止血しましたが出血が多く、母も気を失ってしまい、親子で励ましあっている内に夜が明け、東の空が白む頃部落（自治会）、警防団の方々に救助されたのです。

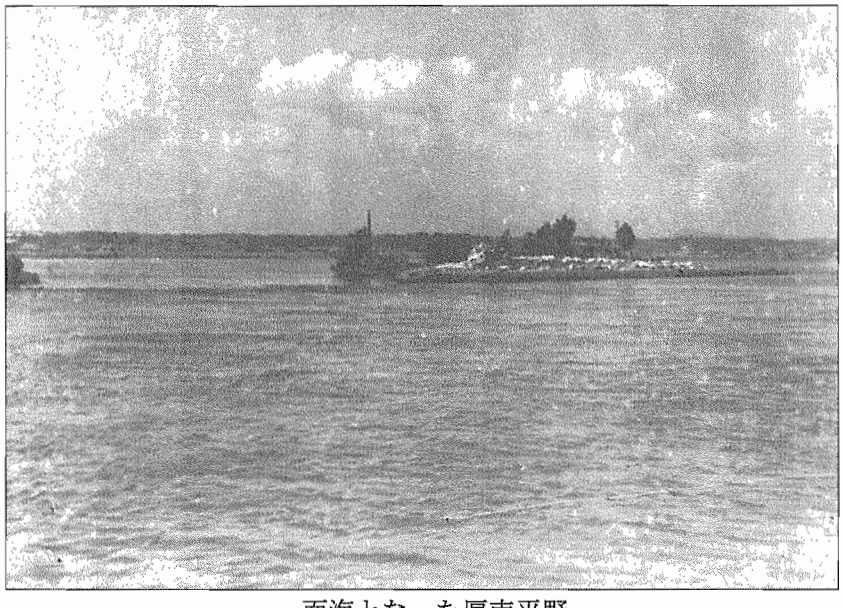
救助の小舟が見えた時には、安堵と嬉しさのあまり感極まって、妹と二人で大声をあげて泣きました。小舟で小畑領の御撫育用水路の土手に上げてもらい、黒石の松江八幡宮の前に行きました。御旅所の回りには水死された方が四～五十人位並べてあり気が遠くなりました。我に返った時は皆んなで手を合わせていました。

其の後、親戚で世話になる事になりましたが、早く家跡に帰って見たくても三日位はかなり水位があり、帰る事も出来ず本当に気懸かりでとても長く感じました。まだ水が引けてないところを帰ってみると、あるのは浮き沈みしている屋敷だけで、飼っていた馬や犬、猫の姿は見えません。流されて死んだのでしょう。一瞬の悪夢に、ただ呆然となるばかりです。家族全員、水死された家も何軒もあるのに、親子四人全員助かっただけでも幸せと思うべきです。

父は支那事変に出征し、大風水害前に召集解除で家にいた時の出来事で、父の指示に従って助かったのです。父が出征中であれば母子三人、水死したと思います。水害後一ヶ月位親戚で世話になり、其の後は市の仮説住宅（中原）に移り住む事になり、本当に有難く思いました。もう西割には帰りたくないと思っていましたが、時が

立てば父にとっても、私共姉妹にとっても、生まれ育った地が恋しく、十八年十二月に元の屋敷跡へ現在の納屋を建てました。家財道具は何ひとつなくても、これで本当に落ち着いた生活ができると思うと嬉しさで一杯でした。

今は、何不自由なく無事幸せな日々を送って居りますが、現在でも台風時期になりますと、あの十七年の大風水害の事を思い出します。毎年八月二十七日には、水害時何百人もの帰らぬ犠牲者の皆様方のご冥福をお祈りしております。



一面海となった厚南平野

厚南風水害を想う

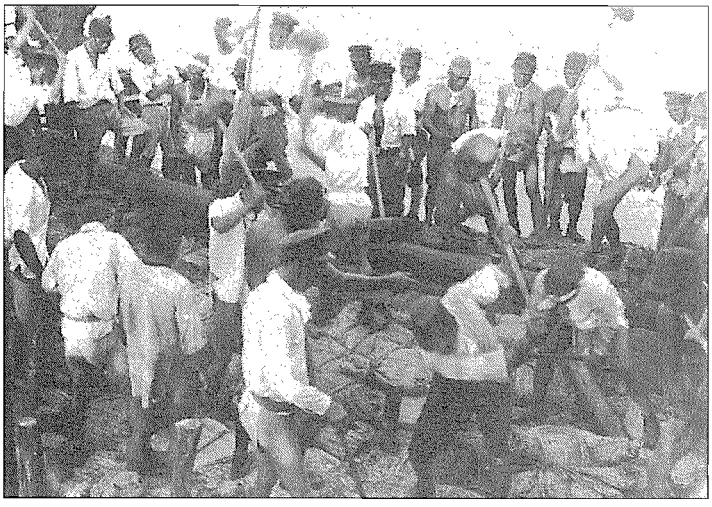
中野開作　小西幸一（当時13才）

台風十二号が近づいたのだろうか今朝から強い風が吹いている。雨は降らない、今を去る六十五年前昭和十七年八月二十七日、この日だけは今でも覚えている。一生忘れないだろう。この日は朝から雨まじりの強風が吹いていた。昔は今で言う台風という言葉を使わなかった。大風と言った。「今日は朝から大風が吹くのう」家の前にへちまが植えてあった。大きくなったへちまが二、三本風に吹き千切られてぶら下がっていた。現在ならラジオやテレビで情報を聞いて備えるのだが当時はラジオさえも我が家にはなかった。夕方から風雨はますます強く大暴風雨となっていた。明るいうちに晩飯をすませて電灯の点かない部屋で寝ていた。当時は大風の日は停電がしばしばだった。蝋燭の火が心細く時折風に揺れていた。外はごうごうというものすごい風雨の音だけ、「土間に水が入ってきた」と母が言いだした。いってみると下駄が水に浮いている、と見る見るうちに水位が上がって敷居まで水が上がってきた。畳が浮く。さあ大変だ。家の中は真暗、畳の上に飛び乗って柱にしがみつく。気が付いたら両手で部屋の鴨居にぶら下がっていた。ごうごうという水の音、首まで水につかって両手で部屋の鴨居にしっかりとぶら下がる。口の中に水が入る、からい、塩水だ、海水だ。海の水が入って来たのだ。ごうごうと猛烈な勢いで海水が上がっていく。雨戸が外れて無い。障子も襖もない。暗闇の中をかすかにすかして見ると小山のような大きなものが流れて行く。何だろう、家だろうか、我が家は大丈夫だろうか、もし流されたらどうしよう、家が流されたら命はないたぶん死ぬだろう。ちらっとそう思った。「しっかりつかまえちょけよおー」父の声が聞こえる。

黒いかたまりがいくつも水の上を流れて行く。「救けてくれー」遠くで泣き叫ぶ声が聞こえた。何か物につか

まって流されているのだろうか。首まで水につかっていても別にえらいとも腕が疲れたとも思わなかった。何時間ぐらいそうしていたのだろう。玄関の上が中二階で物置になっていたが上がろうにも梯子がない、流されたのだ。どうにかしてようよう上にあがった。これで一安心。暗闇の中を真黒いものがいくつも流れて行く。何時の間にか風も次第に弱まっていた。東の空が明るくなったころには水位もだいぶ下がり流れも停っていた。土間に降り牛小屋の方に行って見ておどろいた。無事で居るではないか。

あの濁流の中を体を浮かしていたのだろう。よかった。水につかった位置までは壁土が落ちたのでよくわかったが部屋の鴨居から下五十センチ位まで水に浸っていた。道が歩けるようになったので厚南小学校に登って行った。講堂でおむすびを御馳走になった。小学校の丘から眺める厚南平野の光景は見るに耐えないものであった。光陰矢の如しと云うが年月の経つのは早いものであれから六十五年、半世紀、夢の中の夢である。今改めて、水害の犠牲となられた方々のご冥福を心からお祈りするのみである。西沖の堤防も立派なものが出来ているし、厚東川の護岸工事も大体終った様であるが、災害は忘れた頃にやって来ると云う、油断は禁物である。近年地球温暖化の影響で海面の高さが少しずつ高くなってゆくと云う、海抜〇メートル地帯に住む私達にとっては恐ろしい事である。



復旧作業に励む工兵防

水害に思う

東割　江本帰一（当時13才）

厚南小学校の台地に上がると、目前に厚南平野は一望できた。春には菜の花、麦、レンゲ。秋には黄金の稲穂が波打っており四季とりどりのジュータンを敷いたようであった。

厚東川大橋を渡るバスは松原のあいだをぬって走っていた。妻崎神社の杜と竹の小島はくっきりとよく見えていた。今は厚南は工業用地として又住宅用地として多くの工場、住宅が建ち並ぶ処となり一変した。

一望できた厚南平野が一瞬の内に海面化したのである。時は戦時下でもあり今のような天気予報はなし。昼ごろより特に強くなった暴風で道を立って歩くのも困難なほどであった。妻崎神社にあった二抱もあった松の大木は、直径十五糎もあろうかという枝が折れて、敷地面に散乱するほどであった。

宇部に出ていた姉は交通機関不通のため歩いて厚東川大橋を渡って帰ってきた。日も暮れていた。そのとき橋はすでに高波によって橋上は洗われていたという。

早く寝ようということで床にはついたが寝つかれない。水だという声で物置の二階に上がった。

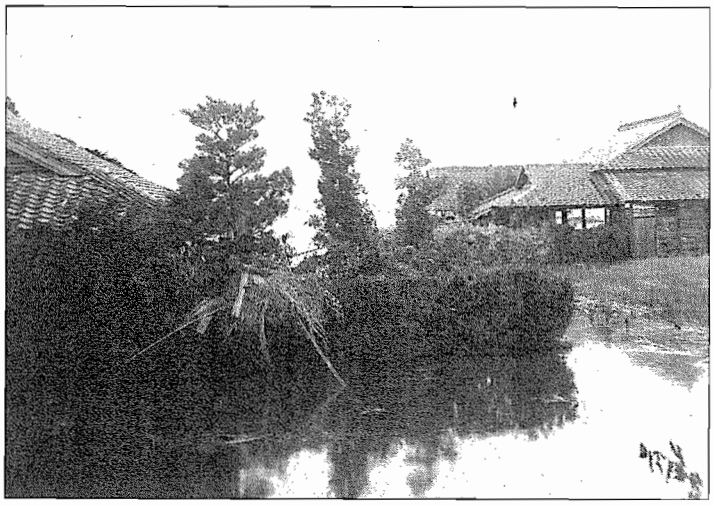
最後に上がるときは畳は浮き膝の上まで水があった。異常な早さである。そこで一夜を過ごした。外は暗くて良く見えない。水は軒まできた様に感じられた。どこまでくるか不安である。そのうちに潮がすこし引きだしたので安心をした。東の空がにじみ始めたので階段を下ろして覗くと長屋にいた馬が母家の中にいるではないか。こみ栓がしてあったが浸水のためはずれカンヌキが抜けたのだ。見通しがよい。壁土、壁ごまえもない。長屋の東隣にあった農家と二階建ての倉庫もない。瀬をつくって流れたのだ。道路も瀬をつくって流れたところは、土は流れくぼ地をつくった。

柱は浸水の状況を示す様に鴨居下五糎以下の処が流木等によるこすりで白くなっている。ああここまで水がきたかということを教えてくれる。藁屋根の家はそのまま流れ田の中に座っているものもあった。翌朝の潮は敷居の上まであがったがその後はあがることはなかった。

家財道具は流され親戚に当分世話になることになった。濡れたものは沖の旦の縄田さんのご好意により沖の旦橋のところまで運び洗ったものです。そのとき父は病床に伏していたが、市に議席があったので支援者に抱きかかえられるようにして臨時市議会に出席した。その後まもなく帰らぬ人となった。その後懸命なる努力によって潮止めはでき前の厚南平野に還ったのです。

終戦の年には油化（今の協和発酵）の爆弾による流れ玉にあい厚東川西岸堤防の一部が決壊して又潮が入った。そのときは日中でもあり沖の方から浸水するのがよく見えた。浅瀬に潮が満ちるようなもので急激でなくゆるやかなものであった。

水害後は市議会議員候補は厚東川堤防の強化を強く公約され努力された。今では沖は開拓されて埋立てられた。堤防も強化されたので前のようなことは無いと思うが再びないことを念願しているところです。



東割の浸水家屋

失った白い筆箱

東割　大亀恆芳（当時８才）

その日、昭和十七年八月二十七日を、生涯忘れることはできない。

その日は午後から風雨が強くなり、夕方には屋根瓦が飛ぶようになった。しかし、それほど大事に至るとは、家族の者は、誰も思っていなかった。夕食は、すでに停電になっていたのでロウソクの明かりで済ませ、早めに蚊帳の中に入った。

風の唸り、雨の叩き付ける音の厳しさで寝付けなかった。

夜勤に出るはずであった父は、強風のため自転車に乗れず、交通機関は完全にストップしていたので出勤不可能のため家にいた。夜に入って父は、家と堤防の間を、何度も何度も往復していた。風雨の強さは、今から思えば異常であった。

何度目かの堤防への様子見から帰って来た父は、「起きろっ。支度をしろっ。堤防が切れた。逃げるぞっ。」と、怒鳴った。

その瞬間、何がどうなって、これからどういう行動を、この暴風雨の中でとるのか、

咄嗟には理解できなかった。とにかく父の言うことに従い、手をつないで家の外へ出た。強風で足が前へ思うように出ず、ほおを叩く雨粒で目を見開いて暗闇を見通すことがなかなかできない。手を離すと、糸の切れた風船の様に飛ばされそうだ。それでもなんとか役場（現在岸本宅が建っている）前まで来た時、「あれは何か」という父の声で、南の方に視線をやると、暗闇を通して稲の上一尺くらいの高さに白い物がかすかに見えた。次の瞬間、「水だ、引き返せっ」という父の声につられて、琴川橋をめがけて走ろうとした。今度はまともに風に向

かって走らねばならず、体が浮き上がるようになるため、うまく前へ進めない。やっとの思いで農協（現在てるのえん）の建物の角にたどり着いたとたん、水が怒涛のように打ち寄せて来た。五月に生まれた弟を背負って最後尾にいた母が、波に足元をすくわれて倒れた。皆が手をつないで引き摺った。波と風に連れて行かれそうなところを、全員の力で食い止めた。這うようにして琴川橋たもとの堤防にたどり上がった。助かったという安堵感を味わうというよりも、これからどうするのかという不安感でいっぱいだった。堤防の上を沖の旦めがけて行くことになった。しかし、百メートル行った杉病院の曲がり角で警防団の方にストップをかけられた。そして堤防と同じ高さにある岡本さん宅に避難させてもらった。

やっと助かった思いが胸の中に広がった。二階へあげて貰った。強風をまともに受けるらしく地震のように家が揺れた。其の後たくさんの家族が避難してきた。眠ることはできなかった。どのくらい後だったか、厚南平野の方の窓から、流される家の屋根に乗って助けを求めて必死に叫ぶ人を、暗闇の中に発見したが、だれも助けに行ける状況ではなかった。すぐにその人は見えなくなった。家族ごとに身を寄せ合いながら夜が明けるのを待った。非常に長い時間に感じられた。東の空が明るくなるにつれて、強風も嘘のように静まってきた。岩鼻の山の上に太陽が顔を出したころ、岡本さん宅を出た。堤防の上を自分の家のある方へ急いだ。雲ひとつない晴天、太陽の光が目の中でチカチカした。昨夜のできごとが信じられなかった。

我が家の見える所まで来た。水が軒まで来ていて屋根しか見えない。厚南平野が海である。茫然自失、これからどうなるのか見当もつかない。その時、堤防の竹藪の中から、人を恋しがるような「もーん」という牛の鳴き声がした。我が家の牛である。近寄って顎の下を撫でると鼻を摺り寄せてきた。よくも助かったものである。

腹がへった。食べるものも飲む水もない。我が家の見える堤防の上にぼんやり座り込む。どの家族も堤防の上をただうろうろしているだけだった。そのうち、父が我が家をめがけて泥水の中を泳ぎはじめた。待つこと二十分くらい。釜を片手で押しながら戻ってきた。中に米が入っている。釜と米櫃が水に浮いていたので手で掬い入れたという。受け取った母が厚東川のやや濁った水で研いだ。堤防の防風林の松の枯れ枝を集めた。石でかまど

をつくり火をつけた。炊き上がるまで誰もそばを離れなかった。二時間も三時間も待たされたような気がした。炊きあがった。どの顔も物欲しそうな微笑で咽喉を鳴らした。母が手掴みで丸める。それを小さい子供から順に掌に受けて口へ運んだ。茶碗、箸、それにおかずはない。適当に塩がきいていてうまかった。近所の人にもおすそ分けしたようだ。充分ではないが空腹を癒した。昼前頃、救援のおにぎりとタクワンが届いた。とにかく涙が出るほどうれしかった。人の善意のありがたさが身に沁みた。

子供たちは、中野の親戚に預けられることになった。午後三時頃の干潮を利用すれば産業道路（今の一九〇号線）が何とか通れるだろうということで出発した。産業道路の上は子どもの膝上まで水があった。足の裏で道路を確認しながら流川までやっとたどり着いた。山裾の道を北上した。途中、黒石の御旅所広場の前を通るとき、そこに薦をかぶせた死骸がいくつも並べられてあるのが見えた。どの死体も腹が膨れ上がっていたので、横からよく見えた。昨夜のできごとのすごさを改めて感じ、身震いする恐怖が体内を走った。そこを早足で通り過ぎた。

親戚に着いた時、どっと疲れが吹き出し、体がとろけるような、気がした。その日は早めに晩御飯をご馳走になり、風呂に入れてもらい、すぐ布団の中へ入り、ぐっすり寝た。

その後、二学期が始まる前日まで、親戚で世話になっていた。

堤防の斜面に小屋掛けした仮説の住み家がずらりと並んでいた。帰って来たとき、どれが自分の家か見分けがつかなかった。やっと夜露を凌ぐ狭い小屋である。明日から学校が始まるというので、学用品はどこにあるかを親に尋ねた。何もなかった。夏休み前半に田圃の除草作業を手伝った駄賃として、欲しくてたまらなかった白いセルロイドの筆箱を盆に買ってもらっていた。それがどこに流されたのかみつからなかったと、母がすまなそうに言った。仕方がないと思いながらも、くやしくてくやしくてたまらなかった。

二学期の始まったのは、九月の終わり頃だったと思う。

そのとき私は、厚南国民学校二年生、八歳であった。

この災害でなくなられた多数の方々のご冥福を祈念いたします。

合掌

食器の配給（厚南堤防）

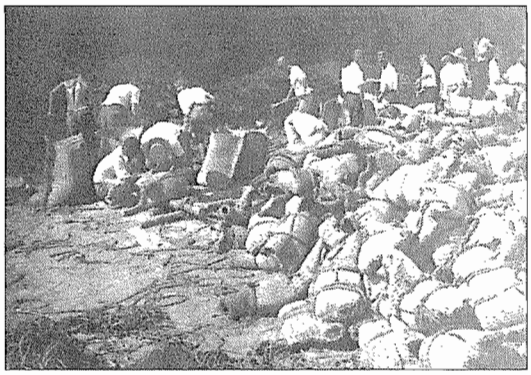
罹災者に給食（にぎりめし）

風水害の思い

黒石　堀　悦雄（当時17才）

昭和十七年の風水害は、私が金属マグネシューム株式会社（現宇部マテリアル）に入社二年目の出来事です。当時は常勤朝七時より夕方五時が定時でした。勤務が終わって六時前、帰宅しようと自転車置場に行きますと風が強く、海岸を見ると白波がたっていた。それでも若さで自転車に乗って岩鼻を通り、東割から黒石に至る道を力一杯自転車を踏んで帰って見ると、雨戸は強風のため飛ばされ雨が吹き込み、家族は山手にある親戚に避難していました。私も行って夕食を食べていると、近所の人が、「すぐ前迄水が来た。」と連絡に来られた。出てみるとすぐ前の土手に、木片や家の屋根のような物が水に流され打ち寄せている。よく聞こえないが人の助けを求めるような声もするが、当時の照明といえば自転車につける電池しかなくどうしようもなかった。数時間たって聞いたが、土手町のところで厚東川の堤防が切れ海水が渦巻き状にすごい勢いで流れ込んだとのこと。その夜は不安を胸に夜の明けるのを待った。あくる朝見ると、目の前には想像もつかなかった凄まじい情景が広がっていて、台風の恐ろしさを痛感しました。

早速、部落総出で救助及び遺体の収容を我を忘れて活動した。又現一九〇号線道路に、潮止め用の土俵を運んだり、漂着物の後片付けを数日間も続けた。台風の後肉親を捜して歩いておられる家族の方の姿が、今も目の前に浮かんできます。遠い過ぎ去ったことですが、思い出したことを記して見ました。今後二度とこの様な惨事のないことを祈って終わります。



復興作業

風水害の思い出

東割　柳　緑　（当時16才）

当時は十七歳で、宇部鉄道株式会社の本社に勤めていました。当日帰りは風雨が非常に強く岩鼻駅で電車を降り、琴川旧橋が破れて通行不能のため、新橋を廻ってズブ濡れになって帰った。夕方電気もつかず屋根瓦は吹き飛ぶし早く食事を済ませて休んだ。そのうち「ザーザー」とものすごい音がするので、なんと大雨がふるものだと思っているうちに頭の方が低くなったので、「これは大変、家が倒れる。」と思って、飛び起き祖母と弟を起こして廊下を出た時にはすでにヒザまで水があった。吊階段を降ろし家族七人で二階に上がったがみる間に潮水は鴨居まで来た。二階から手を伸ばして見ると水に届いた。もう満潮時だから水の増えることはないだろうと父が言った。家のそばの中川の方で家ごと流される人の助けを求めた悲痛な声は忘れることは出来ません。母は一心にお祈りをして、「死ぬ時は皆いっしょよ。」と言った。そのうち潮がだんだん引きはじめ胸をなでおろした。夜が明けて父は屋根の上にあがり隣近所の方と呼び合って無事を喜んだ。そのうち警防団の方々が舟で助けに来て下さった。

私は二階にあった学生時代のセーラー服を着て怖かった一夜であったけれど、チョッピリ明るい気持ちで中野公会堂に避難した。当地の方々には大変お世話になりました。私の現在住んで居る家の長屋に前の道路の電柱が倒れかかった。新開作の網重さんの主人は電柱に登られ助かりましたが、奥さんは子供を背負って流れ着かれたが亡くなっておられてなんともやりきれない気持ちでした。

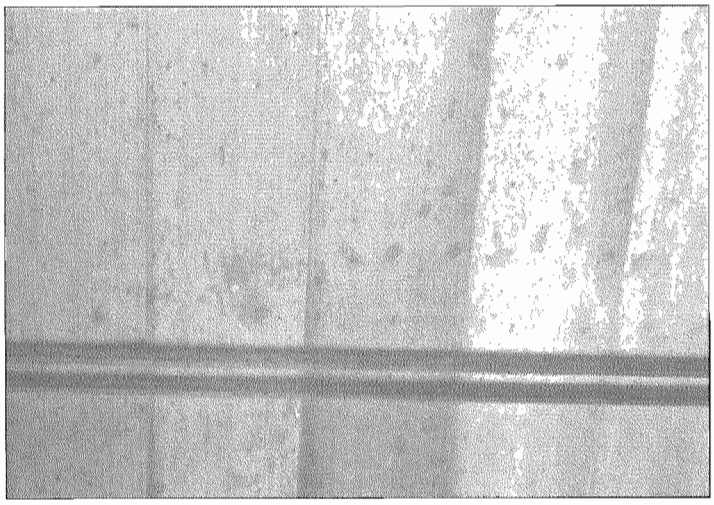
とにかく私の処は流が大変ひどかったので、なにも残らず、新築して三月に家移りしたばかりの玄関には大きな漁船が入っていました。

西宇部に行く道路には多くの死体が並べられていましたし、後日合同慰祭が現グッピーベーカリーの場所で行われました。

潮止が出来るまで二ヶ月かかりましたので、ウナギやヒラメが住みカキが付いていた。若さのせいでそれを嬉しがってみたことを思いだされます。当時の濁流のドベが散ったあとが今も天井に残してあります。

潮が引いた時母達が流された家財道具を毎日探して歩いたのも記憶にあらたです。尚家に住まれるようになる迄、黒石の伊藤様にお世話になり、黒石の方々には大変お世話になりました。どうも有難うございました。

蓮光寺本堂に避難していた罹災者



今も残る柳家の天井のしぶきのしみ

八月二十七日の“大変”

黒石　宮本　弘（当時９才）

昭和十七年の夏休みも終わりに近い八月二十七日、午後五時頃には何となく不気味な風が吹きはじめていた。家の前の青々とした稲田の上を風が吹き抜ける時、稲は真横に伏してしまって直立する間が無い程であった。

時間が経つにつれて、家の藁屋根の藁がどんどん抜けて飛んで行ったり、又屋根そのものが呼吸でもするように上下にバフン、バフンと動く様子を見て、当時小学校五年生であった私の心にも、これはただ事ではないという大きな不安が襲ってきた。

女学生だった私の姉は、帰宅途中厚東川の橋の上で吹き飛ばされそうになり、両手をついて這うようにしてやっと厚南にたどり着いたと言う。本当に恐ろしかったのであろう。

それでも夕方早めに風呂にも入り、食事もして雨戸を閉め切って床に就いたのであったが、父は当日三番勤務で、夜十時が交代時間なので、九時過ぎに大風の中に家を出て行った。それを母が見送って間もなく父が帰ってきて大声で「たいへんじゃ！大ごとじゃ！早う起きてお宮へ上がれ！」と皆をたたき起こした。

屋根瓦などが飛んで来るので、防空頭巾のようなものをかぶって真暗な中を松光八幡宮へ上っていった。姉は生後三ヶ月の弟を背負って。

父は、家を出て三百メートルばかり行くと堀商店前の田んぼが、夜目にも鏡のように輝いて一面海と化しているのを見て驚いた。満潮と重なって、厚東川や海岸の土手が切れたのだ。しばらくは進もうとしたようだが、とても流川を通って小野田の工場まで行ける状態でないことを知るや、道路沿いの家の戸を叩いて危急を知らせながら逆戻りしたのであった。

当時は牛馬を飼っている家も多く、父も牛を連れ出して八幡宮の森につないだ。
八幡宮に上ってみると、暗い拝殿はすでに満員、黒石部落の人だけでなく、おそらくは今流されてきたばかりと思われるずぶぬれの人達も恐怖で声も無くうずくまっていた。
父は警防団員なので、早速下の水際に行き「助けて！」という声をたよりに大きな男のひとを助け上げ、自分でも信じられない程の力でその人を背負い、百段近くあるお宮の石段をかけ上がったと言う。
さて、恐怖の一夜が明けると、翌二十八日は雲一つ無い青空、快晴無風の朝であった。私は弟を背負い、四丁開作と言われる田んぼの方を見に出かけた。潮は引いていたが、新開作か土手町方面から高潮に流されたと思われる大きな家が、どんと田んぼの中に座っているのを見てびっくりした。家の中の戸棚のような所には鶏の死体、また家の外の稲田の中は、寄せられた木材、ごみ、牛馬の死体などが折り重なって、目もあてられぬ光景であった。
しかし、本当の“地獄絵”を見たのは、それから後の数週間であった。
農家の人、警防団の人、田んぼの倒れた稲の中、壊れた家の下などから探し出して来る死体が白石商店前のお旅所広場に並べられ、こもがかぶせてある。男もあり女もあるが、みんな濁流を飲んで顔も体も紫色にふくれ上がり、頭髪もバラバラに乱れ、裸同然の無残な姿であった。中には、両手で何かにしがみついた形のままで死んでしまった老人もあり、地獄の一夜が目の前に再現され、涙なしには見られなかった。
こんな死体置場は、ここだけでなく妻崎駅前の原分教場にもあったし、まだほかに何か所もあったに違いない。
助かった親が、行方不明の我が子を捜し歩く姿、親類縁者の遺体確認の彷徨が何日も何日も続いた。そのうち死体も腐乱して来て、持ち上げようとすると、皮膚がズルッとむけてしまう。そして、あの耐え難い悪臭！その後も、土手の修復までは、来る日も来る日も海の潮が厚南平野を洗った。満ちればもちろん道路も通れなくなる。

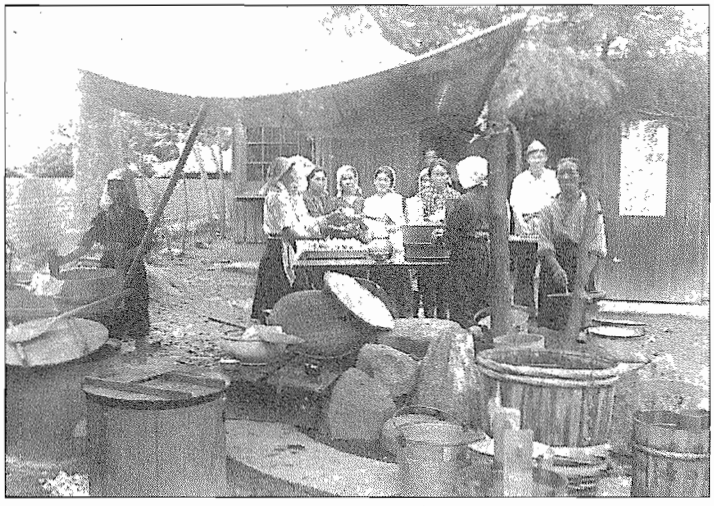
厚南に際波という地名があるが、まさにその時、海水は際波に打ち寄せ、厚南を干拓前の昔の姿に戻して見せたのだった。

黒石でも、八幡宮下の宮川を海水が上り、おそらくは宮の後の方迄達したのではなかろうか。私は宮川でたくさんの海の魚を見た。小舟もあったように思うが、私の記憶ちがいだろうか。

さて、多くの死体の中には、何日経ってもついに取りに来る人の無いものもあり、相当数の死体が、現在の泉町の上の台地に運ばれて埋葬されたように思う。

家人の記憶によれば、土手町から流された家の中には、昭和九年九月の室戸台風の時、大阪府豊津小学校で倒壊した校舎の下で身を犠牲にして六名の子供を助けられたあの有名な吉岡藤子先生の生家もあり、その吉岡先生の位牌が黒石に流れ着き、それが、同じく有名な教育者日田権一先生の手によって拾い上げられたことが、当時の新聞に大きく報道されたという。

私の知る限り、まさに厚南一番の“大変”であった。



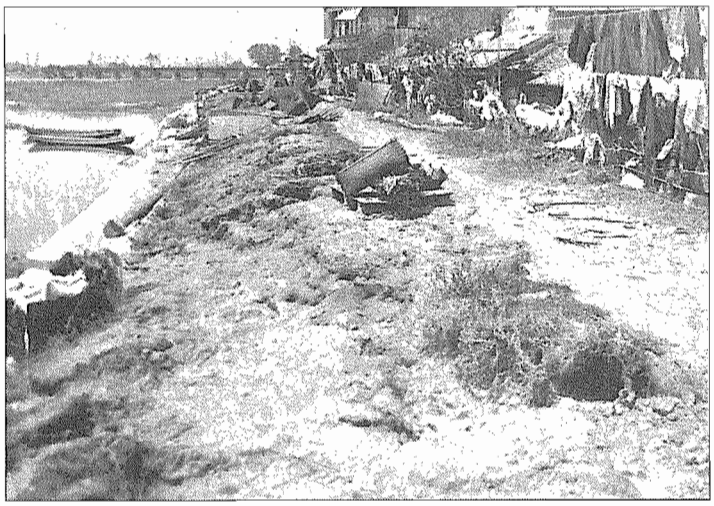
婦人部隊の炊出し

恐ろしかった風水害

東割　隅田寿人（当時17才）

昭和十七年八月二十七日、当日は朝から猛烈な風雨であったが、今のように気象情報があるわけでもなく、大風がどういう状況にあるか全然判らなかった。停電で風雨もひどいので夕食も早く済ませ、午後八時ごろには皆床についた。風の音で中々寝つかれずにウトウトしていると、突然「バリッバリッ」と大きな音がして表の間の畳の下から大量の水が吹き出してきた。父が「皆起きろ」と大声で叫ぶと同時に全員一斉にとび起きた。水は忽ち膝まで増水し、畳は浮き、机や椅子も流れ出した。何が起きたのか皆目見当がつかない。更に水位があがってくるので二階へあがろうとしたが、階段が浮いて流れ、二階にもあがれない。やむなく子供達をタンスの上へあげようとしたが、タンスも浮いて駄目。万策つきたと思った瞬間咄嗟の機転で、私が家の裏にあった柿の木の枝に飛びついた。そして、父が下から子供達を抱え、私が上から手を引張り順次柿の木へ避難することが出来た。ただ、兄は、水が出ると同時に外へとび出した。外は既に胸まで水があり流されそうになったが、幸い、桃の木につかまり、家の裏を伝って漸く柿の木へ登ってきた。その間何分位経ったのか、とにかく無我夢中で一瞬の出来事でした。柿の木にしても、通常ではとてもとびつける高さではなく、追いつめられて馬鹿力が出たのかなあと後で感心したものでした。何れにしても家族全員（父、母、兄、私と弟、妹それに従兄弟の計九人）とりあえず柿の木へ避難できホッとしました。私達が柿の木に登った時には既に隣の石川の家は跡形もなく流されていました。そのうち、柿の木の下枝も水につかってきたので屋根へ移動しました。依然として風雨は強く、暗闇の中で夜光虫であろうか薄気味の悪い蒼白い光を放ち、全身ズブ濡れで夏とはいえ寒くてならない。ガタガタ震えながら風雨の収まるのを待っていた。なんとか屋根伝いに二階に入ろうとしたが風雨がひどく動けない。その頃に

なって漸く厚東川の堤防が決壊したのではないかと推察した。
父が今から六十年前、厚東川の上流の堤防が決壊したことがあるが、その時の教訓で家というものは、軒がつからなければ流れることはないと聞いているのでまだ大丈夫と言う。しかし、流されることも考え、大人と子どもを組合せ、グループをつくり、万一に備えるなど筆舌につくせない本当に悲愴なものでした。
朝方になり少し明るくなり、風雨も少しおさまってきたので、屋根伝いに漸く二階へ入ることが出来た。丁度二階にあったブドウ酒を飲みながら全員無事を喜び合ったが、未だにその時のブドウ酒の味が忘れられない。
一本の柿の木や、桃の木のお陰で全員の命が助かった訳で、父はこういうこともあるので、家の回りには木を植えておかなければいけないと申しておりました。
明るくなって、家の中を見ると、堤防の松の木、電柱、坑木等のガラクタが天井まで山積になっており、見る影もない有様で、家族一同茫然としてしまいました。そのうち、警防団の人が舟で迎えにきてくれ中野の公会堂へ避難していきました。途中は一面海の様で、家は壊れ、牛馬の死体は横たわり、昨日までの姿が一夜にして様変わりの状況に改めて自然の猛威のきびしさを思い知らされたものです。
中野の公会堂で、それぞれ避難先を割当てられ、私達家族は黒石の平田さんのお宅にお世話になることになりました。翌日から男は家の後片付、潮時をみては毎日毎日家との往復、特に、フトンや衣類の運搬には閉口した。泥水につかった衣類を厚東川の上流の広瀬の河原まで運び、女子どもがそこで洗濯し、父の実家（広瀬の白石）で乾燥整理した。今のように自動車がある訳でもなくすべて車力で運んだ。兎に角大変な作業でした。
なんとか応急措置として、四畳半、三畳の部屋を修理し、家族一同狭いながらも、一緒に暮らすことが出来たのは十一月頃であったと思う。
六十五年を経た今日、当時の恐ろしかったこと、苦しかったことを思い浮かべながら、今日の幸せに感謝するとともに二度とかかる災害の起きることのないよう祈念するものであります。



厚東川旧橋（琴川橋）付近

藤山区岩鼻付近

思い出

東割　山村皎二（当時14才）

夏休みも残り少ない八月二十七日、いつもと変らぬ朝を迎えた。親父は会社へ、弟達は宿題に取り組んでいる。平穏な朝である。ただ空は少し曇っていた。それは私が過去に経験した通常の曇り空とまったく変ったところはなかった。然し昼過ぎから風が出て来た。午後三時頃だったか、外に出てみると庭の木が盛んにざわついている。どんよりした空を見上げると、黒い雨雲が次々と東から西へと飛ぶように流れて行く。「これはおかしい。嵐にでもなるか。」と一瞬心配になる。

当時は太平洋戦争のさ中で、台風情報なんて全く入って来ない。ただ、各人が独自で現状判断するより外に方法はなかった。風は時を刻むにつれて激しくなって来た。夕方五時頃だと思う。母屋の雨戸はガタガタと大きな音をたて、風は異常なまでに強さを増して来たようだ。ガラス戸のある部屋に行ってみると、庭木の枝は真横になり倒れんばかりである。風が息をする度に、ガラス戸は「くの字」に曲り込んで今にも吹き倒されそうである。

思わず両手で突っぱって見る。眼を転じると前の納屋のわら屋根が風にあおられて、バラバラに引き裂かれ舞い上って行くのが見える。「ああ、これが台風か。」と初めて気がつく。七時頃川の様子を見に堤防に上がる。堤防の上は猛烈な風で吹き飛ばされそうで立っていることは出来ない。日頃はやさしい川水も荒れ狂う大波となって堤防の上部をたたきつけている。これは危ない。わたしは転ぶように堤防を駆け下り、家へと走り込んだ。「とにかく御飯だけは食べよう。」とローソクの明かりを頼りに夕食をすませたが、不安は募るばかり。親父は「よもや堤防が切れることはあるまい。」と言う。過去に堤防が切れたと言う話を聞いたこともないし、切れては

困る、と言う強い期待感がそういう発言をさせたのだろう。近所の人達もみんなそんな考えであったのだろう。夕方になっても誰も避難する者はなかったようだ。

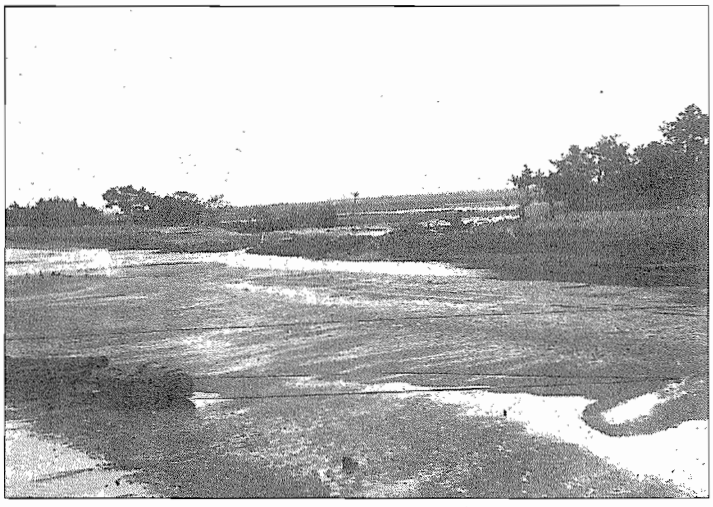
わたし達は母屋に集まり、みんなここで寝ようということになった。然し、心配で誰も寝ようとしない。ローソクの光が異様な程に一人一人の顔を浮き上がらせていた。時間は九時頃だ。突然前の方で「バタッ」と大きな音がした。走って行くと玄関の戸が倒され、風と共にどす黒い海水が流れ込んで来た。台所にかけ戻ると床下からは濁流が吹き上げていた。「やはり沖の堤防が切れたか。」家の者は、「水だ、水だ！」と叫ぶばかりで、なす術を知らない。そのうち、水は急速な勢いで増え続け、畳がブカブカと浮き始め、考えている間もなく水は胸のあたりまでなって来た。いつの間にかわたしは小さな妹をつかまえていた。とっさの思いで裏戸をけり破り、杉垣に向かって妹をつき出した。八十五歳の老婆も突き出した。わたしも続いて出た。ここに至って怖いという恐怖感は全くなかった。ただ「死んではならない。逃げなくてはいけない。」ということだけがすべてであった。この年の一月に生まれたばかりの妹をかかえた母も、雇っていた子守も、弟達も全部で九人、気がついて見ればみんな杉垣につかまっており、どうやら命だけは助かったようだ。然し風は益々強く、水は増え続けている。首だけ出して濁れ水につかっているのでは身体が持たない。幸い杉垣の中に大きな榎があったのでそれに登らせた。みんなずぶ濡れである。

それから何時間経っただろうか。風は南風に変わり、いくらか弱まって来た。水も減っている様子。急に四歳になった妹が「蛍！蛍がいっぱいいる。」とはしゃぎ始めた。子どもなりにやっと落ち着きを取り戻したのであろう。波が榎にあたって砕けると夜光虫がピカピカ光るからである。危機から脱したと言う安心感がこれによって、みんなの心をやわらげたようだ。緊張からときはなされたのか、濡れた寝まきが冷たく感じる。「朝はまだか。」と妹が言う。その時である。突然「山村さーん。」と叫びながら舟をこいで来る人がいる。わたしはあらん限りの声を出して返事をした。その人は前の大亀さん（二十七歳）であった。舟はだんだん近づいてくる。「おお、これで本当に助かったのだ。」と自分に言い聞かせるように確かめたのである。

わたし達は堤防に運ばれ、旧橋付近の家で休養をとった。夜が明ける頃には、風もすっかり止んでいた。わたしは半乾きの寝まき姿でぶらりと出て行った。台風のつめ跡はなまなましく、無残な光景は眼を覆わんばかりである。これからの復旧、人々の生活がたいへんだなあー、と一人、堤防に佇んでいる十五歳の少年はそんなことを考えながら、いつまでも動こうとしなかった。

この手記を終えるにあたり、この六十五年間厚南地区の人達は大きな災害を受けることもなく平穏な毎日を過ごして来た。改めて有難いことだと、感謝の気持が湧いてくるのである。

塩屋台付近で流出家屋の後片付け



流出した厚東川堤防

大風水害を体験して

東割　松永　美代子　（当時21才）

昭和十七年八月二十七日、それは私の結婚した翌年の出来事でした。その日は朝から風が強く昼前から大風となり、私は午後居能町迄買い物に出掛けました。（今のように近くにお店もスーパーもなし。）しかし看板は飛ぶし屋根瓦は落ちるし店は雨戸を閉める状態。夜は大風の為電燈はつかず暗い儘で蚊帳に入っておりますと「ゴーゴー」と異様な音が聞こえます。驚き父を起こしました処「こりゃあ大変だ！大水だ！」の声、一同驚き仏間へ入ろうとしたがもう畳はボコボコ浮き上り立っておられない。運良く一間廊下に応接台があったのを幸いにその上に母と二人で上り、刻々の増水（泥水）を肌に感じながら助けをまっていました。主人は急ぎ横の襖をはずし縁の黒い木の角で天井の薄板を必死で破り突き抜いて、母と私を天井裏に押上げ自分は泥水を泳いで屋根に上り、父と共に瓦をはぎ、間もなく屋根瓦を取り外したらしく私共を屋根に引き上げてくれました。家族四人で屋根の上に座ってホッと一安心です。その時暗闇の中から「助けて、助けて」と彼方此方から微かに聞えて来ましたが、水の中からか道路を通る人の声かさっぱり暗くて分かりませんが兎に角、潮水（泥水か）が軒下すれすれまで浸水していることだけ光って見えました。「家が流れることは無いが、万一を考えて土手に上がろう。」と父と主人の誘導で一歩一歩滑らないように進んでいたが、何しろ首から下の衣類は泥水で濡れ、夏とは申しても寒かったこと、寒かったこと。家と土手の間に藁の木小屋が浮かんでいたのを幸いに、その上を伝わって辛うじて土手に這い上がった。「これで本当に命拾いした。」と四人で喜びました。厚東川は濁流で大暴れ、丸太棒が土手に打ち上げられ、うっかり歩けません。薄暗い中を歩き旧橋の郵便局（現在は移転）に避難して隣の岡本さん宅の庭で火を焚いてたくさんの人が囲んで濡れた寝巻を皆で乾かしました。今思えば良くもまあ寝巻の儘で旧橋迄

行けたもの！「着のみ着のまま」とはこういう時の言葉でしょう。

翌朝は「嵐の後の静けさ！」昨日の大水害は嘘の様な上天気で次々に水害見舞客に接し、昼前に漸くおにぎりを頂き人間らしい正気を取戻す。本当に人の情を喜ばしく有難く感じました。

翌日からの仕事は潮の合間を見ては舟に乗り（床下迄は何時も浸水している）我が家に入る。新築間も無い我が家の建具、畳、私の結婚記念写真、主人の会社の賞状他私の結婚衣類一切水浸しの無残な姿を涙して眺めつつも、じっとしてはおられません。女性は家財道具の鍋釜を第一に運び出す。男性は古木材を運び出しては土手の松の木を支えにバラック作り。彼方此方でトンカン、トンカン金槌の音。立ち並ぶバラックの街。近所助け合い、薪までも分かち合いのご飯炊き。おにぎりの配給も仲良く分け合いながら一緒に食事をした時の美味しさ。家の復旧作業、田んぼの整地又交替での沖の堤防復旧工事。お互いに一日も早く復旧したい一念で一日中を土運び、セメント練りの勤労奉仕。誰一人嫌な顔もせずに出掛けました。私共水害被害者一同よく病気もせずに二ヶ月間近く続いたバラック生活を頑張ってこられた事だ。悲しい中にも愛情あるバラック生活は何時迄も心に残ることでしょう、と追憶の念一入りです。

あれ以来六十五年経ち時代は移り変わっておりますが、現代の若人達にもあの荒廃した水浸しの光景を一同に見て頂き、「災難は忘れた頃にやって来る。」と申しますがあの当時の人達の耐久力、忍耐力、復活力のある社会人になって頂きたく常に念願しております。

最後になりましたが、暗闇に「助けて、助けて！」の声が耳に今も残っています。

当夜、大波に呑まれた沢山の方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

厚東川堤上に避難した市民

風水害の思いで

中野開作　竹本光昭（当時12才）

私の家は父四十二歳、母四十二歳、そして祖母七十歳、姉十六歳、そして私十三歳、妹九歳と四歳、弟六歳の八人家族、貧乏ではありましたが仲よく暮らしておりました。当時父は宇部電気鉄道（現小野田線）に勤務しており、私は長門工業高校（廃校）の二年生でした。母と祖母は六反の「小作田」を含む約一町歩の農業を営んでおりました。私は、いつでも父の自転車の後ろの荷台に乗って新開作駅（現在は廃止）まで行き、父は雀田駅まで、私は沖の山駅（現在は廃止）まで乗って学校へ行くのが、日課となっていました。

当日父は風邪をひいて勤務を休み寝こんでいました。風が強くなり、停電でもあった関係で早めに夕食をとり、寝ていたのですが、暗くて時間はよく覚えていませんが、隣家の杉野勝元さんの「オーイ竹本は逃げたか。土手が切れたぞ。」という声で三十八度位の熱を出して寝ていた父が、よく寝ていた子どもたちをたたきおこし、着の身着のままで外へ飛び出しましたが、沖の方から真っ白な波が月に映えて悪魔のように感じた事をありありと覚えています。父が妹を背負い、母が弟を背負って、私が祖母と妹の手を握り、線路の上を一目散に宇部駅の方へ走りました。父と職場が一緒であった里の尾の三隅さんのお宅へご厄介になるつもりだったのです。上開作の中川の上にかかっている鉄橋まで来た時急に祖母が動かなくなりました。七十歳であった祖母にとっては本当に死ぬ思いであったのでしょう。私はもういいからお前たちは逃げなさいと言い出したのです。俺がおんぶするから一緒に逃げようと背中を出すと、お前におぶさるわけにはいかないといい、漸く腰をあげてくれ嬉しいやらほっとするやらで後を振りむくとほえるような白波も見えません。それ迄は周囲を見るような余裕さえもなかったのです。皆なの無事な顔をみてよかったねと漸く笑顔が戻り、急ぎ足で目的の三隅さんのお宅へ着く事がで

き、疲れと安堵感で朝迄グッスリ寝てしまいました。
厚南小学校が避難場所と決まり宇部駅前を通り、大森を抜け、学校へ着いたのは十時頃です。十組くらいの避難者がいましたが昼過ぎには、ざっと講堂一杯になっており、三隅さんの処で頂いたおむすびを食べ乍ら「今晩はどうするの」と不安で一杯でしたが、幸いにして蓮光寺下の高野さんが尋ねてこられ、「今晩は家へ泊まってください。」という事になりましたが、高野さんとは多少の縁続きであり本当に地獄に佛とはこの事です。
明くる日、潮も引き、父と私とで一度家へ帰ってみようという事になり、途中「家はあるかな。」「あればいいがな。」と父、「死人が家の中にいなければいいな。」「うん、鉄道が一寸高いから大丈夫だろう。」と父、「牛を売っておいてよかったね。」「うん、丁度うまい具合に買い手があったからのう。」と父、その事を思い出してか、牛を殺さなかっただけでもよかったのうといい乍ら安心した様子でした。家があればいいな。なかったらどうしようと期待と不安にかられ乍らも家が見えた時には本当に感無量でした。家の中は何一つ見当たりません。幸いにも仏壇は残っており感謝し乍ら二人で手を合わせていました。今夜一晩高野さんにご厄介になって、明日は帰る事にしようと決めました。高野さんからお米を頂き二、三日分の食料も確保でき、高野さんにお礼をいい全員で帰宅しましたが、寝る所がありません。あちこちに散らばっていた木切れを集め鉄道線路の上に仮小屋を作り寝泊りする事としました。昼は家の修理をして一日も早く家の中で寝ることのできる様にと、父も私も一生懸命でした。仮小屋の生活も二日だけで終る事ができましたが、唯、雨が防げるだけです。時期的にも布団もいらず、それこそ着の身着のままの生活です。貯米器の中にある真黒になったお米を厚東川で洗い、それを乾かし石うすで粉にしてお茶をかけてたべ、戴いたお米を食い延しをしておりました。宇部市の援助で炊き出しが始まりましたが、小さいおむすびが三個ずつです。母がお前は仕事をするからと一個をくれましたが今考えると二個のむすびではずいぶん腹も減っていたろうと思いますが、当時は、腹の空いている方が先で考える余裕もありません。家の方も段々と修理でき、壁も父と二人で塗り、おかげで左官仕事も随分と上手になりました。
その内に、全国から救援物資が届き、暖かい皆様のお情けに感謝し乍ら漸く平常の生活に近い状態に戻る事が

できましたが、依然として、満潮時には床下迄潮がきており、このあと又台風がきたらと何時も心配し乍らの生活でした。その後、水防団という組織がうまれ仮の潮止め工事も行われ一応潮の来ない生活ができる様になりました。今度は真黒になって倒れている稲藁をあつめての焼却作業です。厚南では十年位は潮が抜けず、稲を作る事はできないという噂がたち米が作れないという不安で稲藁集めにも大変気落ちした感じで作業した様に思います。

私にとってこの風水害は何もかも辛い思い出許りですが、唯一つだけ淡い思い出があります。始めの間は蓮光寺迄水を汲みに行っておりましたが、後になって梅本病院（現在はない）の所の土手に水道がひかれ、その水を汲んで帰るのが日課となりました。バケツ一杯の水を汲むのに三十分位かかります。一杯目の水を汲み終わった頃、かわいい女の子が水を汲みにきました。先に汲んでいいよ、といい乍らゆずりました。ありがとう、といってバケツを据えましたが、私にとって今迄感じた事のない、言いようのない感じを憶え、別に言葉を交わす事のないままその日を別れましたが、偶然にも明くる日も、時間が一緒でした。水を汲み乍ら言葉を交わす事もできずにその可愛い横顔許り眺め、ついに名前さえ聞くこともできず四日間の逢瀬は終りました。私は毎日水を汲みに行きましたが、四日目が最後でついに逢う事はできませんでした。六十五年たった今、風水害の思い出を書くに当たってあれが初恋だったのかなと思い出し乍らこれを書いています。

終わりになりましたが、お世話になりました里の尾の三隅さん、中野の高野さんに心から有り難うございましたと、お礼申し上げます。

昭和十七年の風水害に寄せて

東割　木谷定教（当時６才）

当時私が、国民小学校二年の八月二十七日の出来事は、六十五年経過した今日なお、まざまざと私の脳裏から離れたことはございません。

亡父が、まだ太平洋戦争に出征する前の年であったことを覚えております。大型台風が通過したのは、当日の午後三時過ぎだったのではないかと思われます。遊びに疲れた弟と昼寝をしていた所、突然の暴風の強さに、目が覚め、周囲を見回すと、ガラス戸、襖が飛び始め、手の付けられないような状態で、風速五十メートル位は、あったかもしれません。

藁葺きの藁、瓦が、田畑一面に乱舞するさまは、想像に絶する感があり、外に出ないよう注意されたのです。一瞬の猶予のできない状況のもとに、私が居ました母屋の雨戸への釘付けは、長屋におられた「松村」さんがしてくださり、何とか風を遮りよぎり、夕刻を迎えたのです。

しばらくして父が会社から帰り、途中厚東川の「新橋」が、歩いて渡れない程暴風雨に見舞われており、大潮で既に波しぶきが堤防を越えている有様を話してくれたのです。

風はますます吹き荒れ息する暇もないほど揺れ動く中、母屋での食事はとても無理で少しでも風あたりの少ない長屋におられた「松村」さん家族と一緒に夕飯を始めた途端、停電になったのです。

そしてまもなく「土手が切れた」という悲壮な声で走り抜ける人の声を耳にしたのです。（それが後に「大亀寿一」さんであったことを聞かされました。）

食事に入る前、万が一堤防が決壊したら、長屋の二階へ上がる話も出ていたので、暗がりのなか、私は咄嗟に

一番早く二階に上がったことを記憶している。家族皆な長屋の梯子を駆け上がったが、弟「宗祥」がいないと云うので、又私が駆け下りた所、開き戸を大津波が怒涛の如く入って来た。二階に上がる梯子をやっとの思いで上って見ると弟は、母親と先に上がっていたことが解ったのです。

皆な無事を喜びあっている中にも、長屋の天井まで、津波が刻々と迫り風が幾分和らいだ頃、父が屋根へ出る様に勧めたのです。周囲は一面海で沖の方にあった家が流されており、父が周囲の家々に呼び合って生存を確認したのです。

この時の怖さは、未だ忘れることは出来ません。夜明けが近づくにつれて、風雨も収まり、屋根瓦の上にまだ居ました所、近所の「三隅」さんが、舟で迎えに来られ、今の旧橋の堤防へ上ったことを覚えています。

父が、その頃「警防団」に入っていた関係もあり、潮が引き始めると直ぐ遭難された方々を何人かの皆様と一緒に探索したようです。

私の住む上組班だけで十七名近い方々が、尊い命を亡くされたのです。

人間の力で、どうする事も出来ない自然の怖さを改めて知ると共に、すべての物を失い、柱だけになった我が家を見て、茫然と立ち尽くしていた父の姿が思い浮かばれます。

学校への登下校は、特に東割方面はしばらく休校であったと思っております。第一に着る物が何一つ無い本当に悲惨な生活だったのです。今でも忘れられないのは、神奈川県地方のお見舞いの学生服を着て通学が出来、ことばで表せないほど感謝の気持ちでいっぱいでした。

やがて茅で葺いた手製のバラックの仮住いが三ヶ月位続いたと思われます。此の間、地域の方々から勿論、全国から本当に温かい物資の数々に子供心にも、その品物が配給される日が楽しいひとときであったようにも思われます。

数週間して、通学出来るようになっても、潮の満干のため、舟で通学していたことをよく覚えています。

今六十五年を経過して自然が巻き起こす猛威に今日程の心の準備も無く、その怖さを知らなかったのは事実で

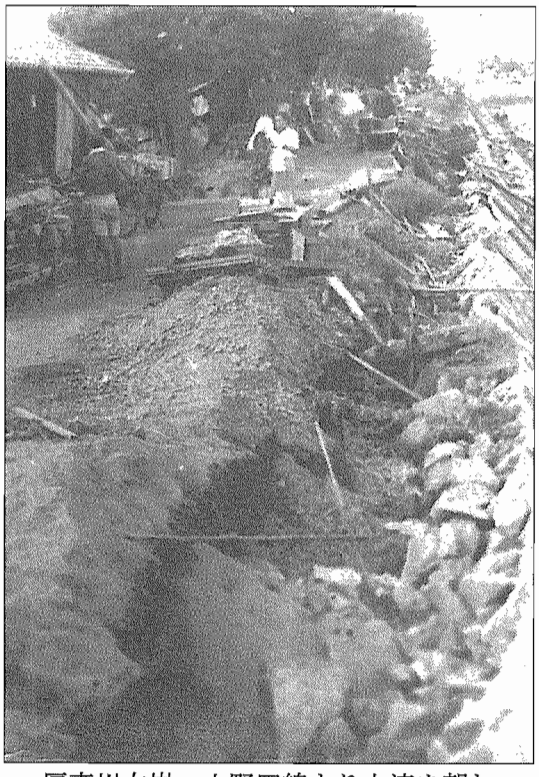
す。

災害は、忘れた頃にやってくるかも知れません。

而し厚南で生まれ、厚南で育った私にとって別の地への移住は考えられません。厚東川を東に海抜〇メートルの地ですが。

四季の中の特に、夏に水と親しむ少年時代の厚東川岸辺で小さなシラサや、クマンジョウ（蝦）や、鯉や、ツガニ（蟹）や、潮が満ちて来れば、鰡や、チヌや、セイゴや、たくさんな魚に接する機会のあった川と、又厚南平野での一面黄金色にうれる刈取りの夕映えの風景のなかで、長年歩んできた道程に今生かされている事の喜びを噛み締めつつ…。

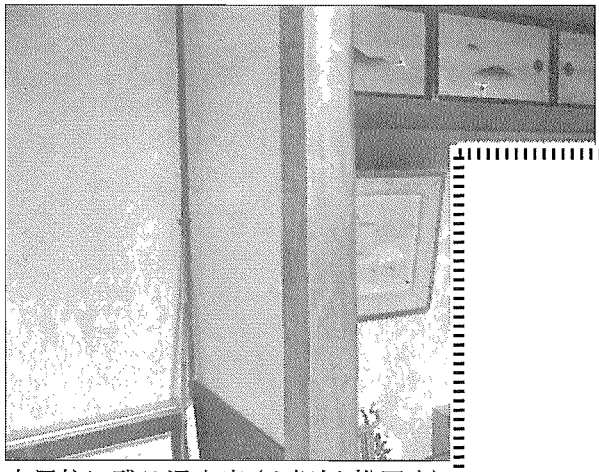
厚南を守り、基礎を築いて頂いた先輩諸氏の皆様に心から感謝申し上げずには居られないのです。



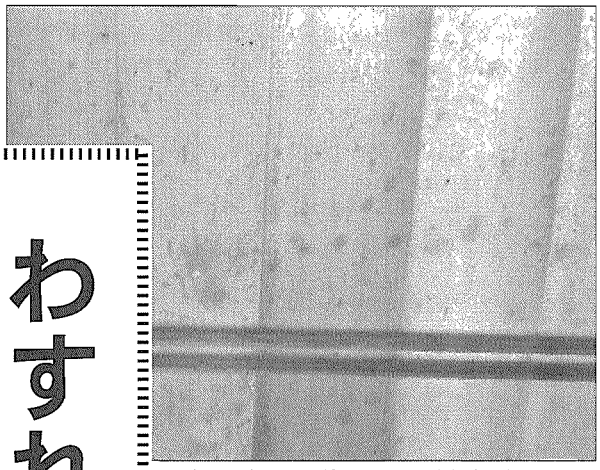
厚東川右岸　小野田線より上流を望む

わすれまいぞ周防灘台風

…写真篇…



大黒柱に残る浸水痕（小畑領 松冨宅）



今も残る天井のしみ（東割 柳宅）

中野開作の犠牲者の供養等

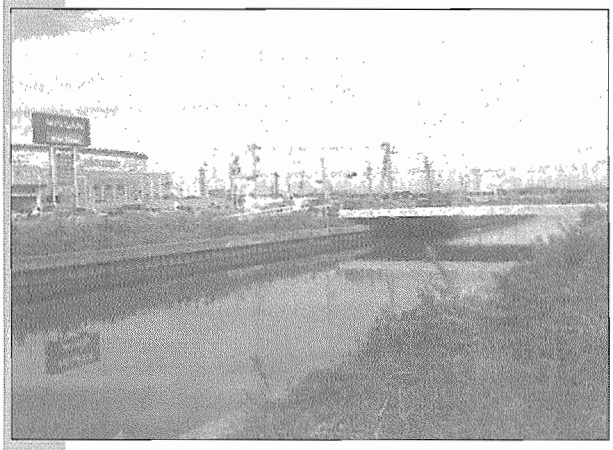
妻崎神社境内にある受難の碑

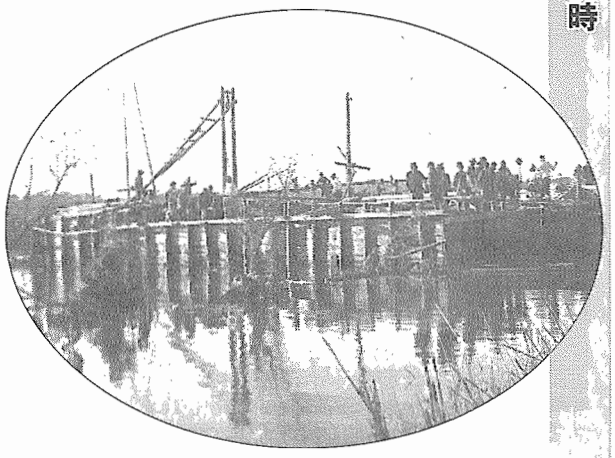
災害地『今』と『当時』

今

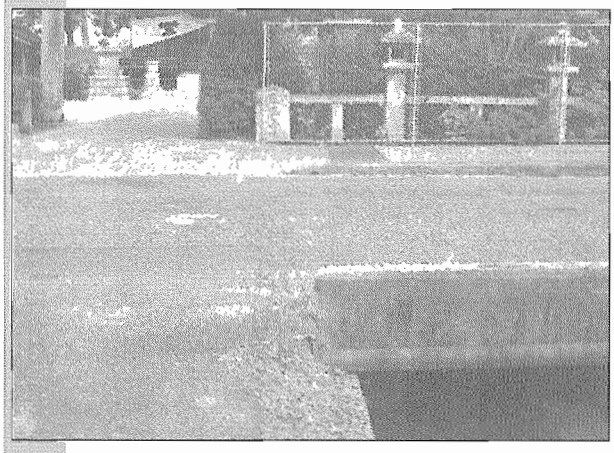
当時

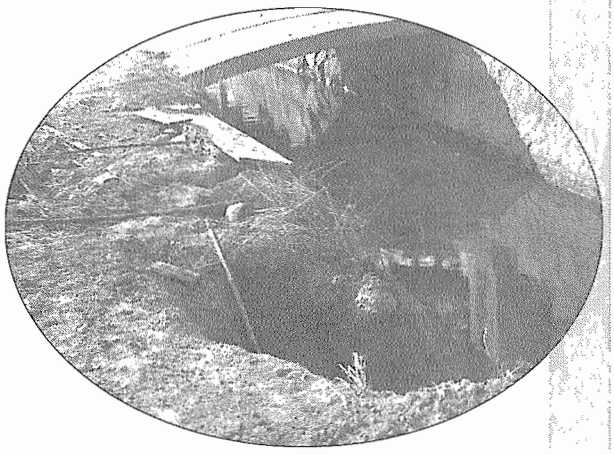
西割産業道路沿い堤防の仮樋門工事



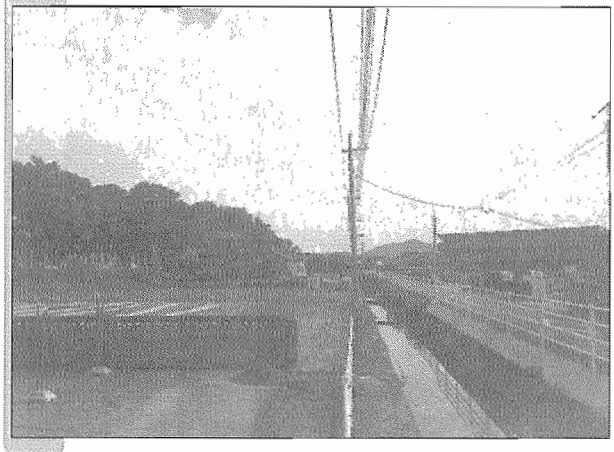


妻崎神社前用水路の被害





流出した住居跡（塩屋台付近）

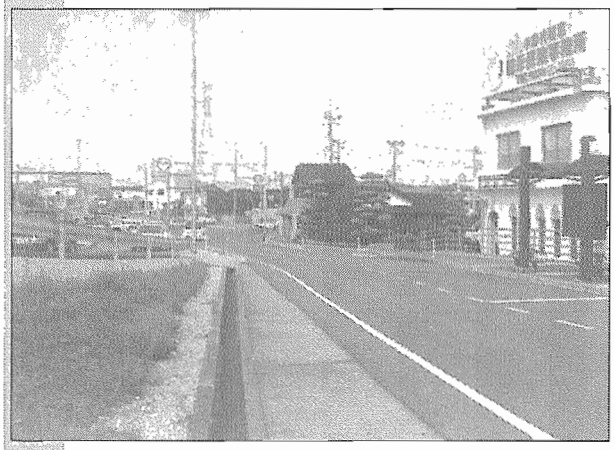


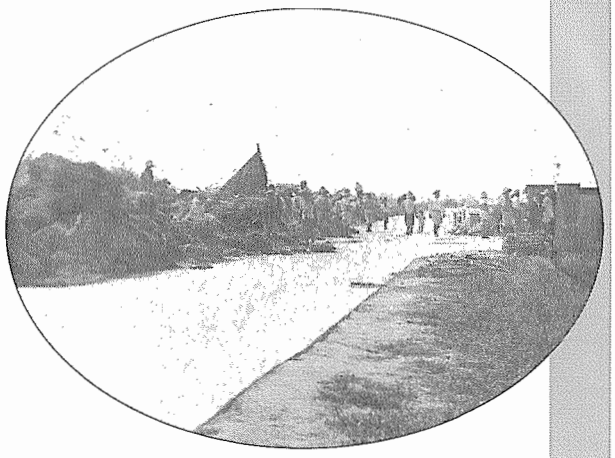
今

当時

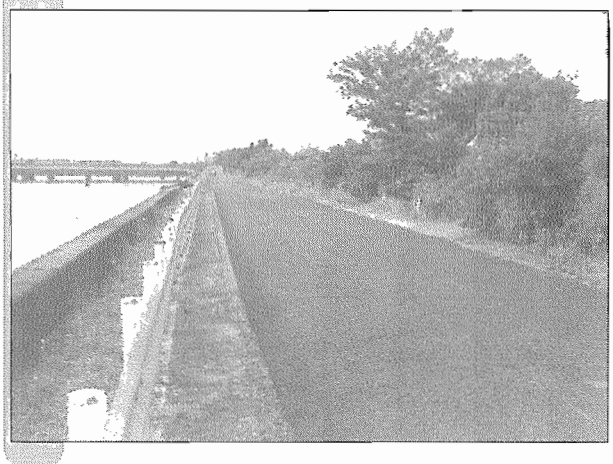
厚南区産業道路（現190号線）潮止工事

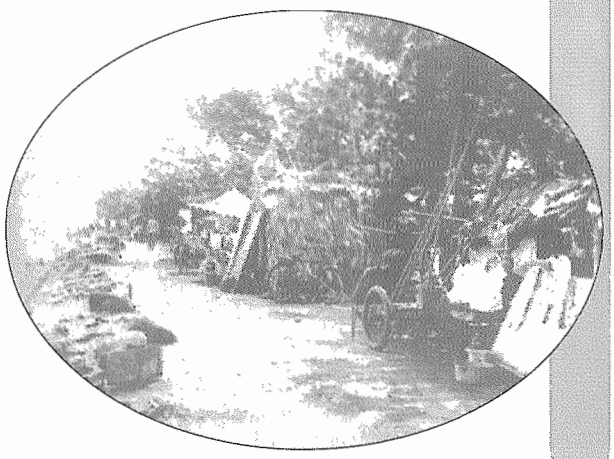
厚東川大橋西詰





厚東川堤防西側（厚南側）

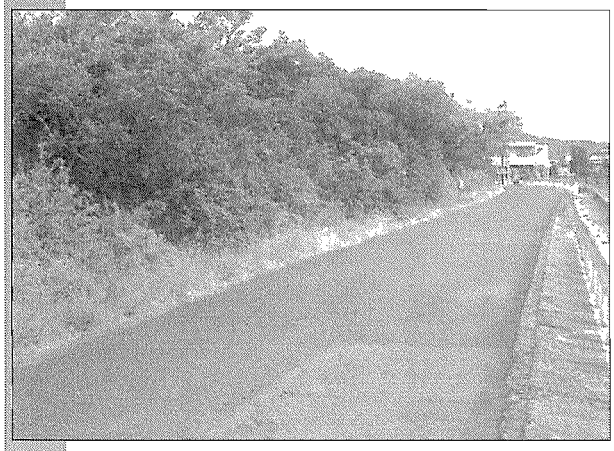




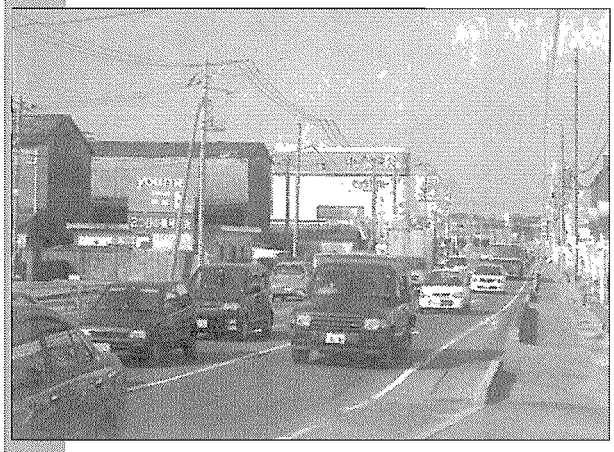
今

当時

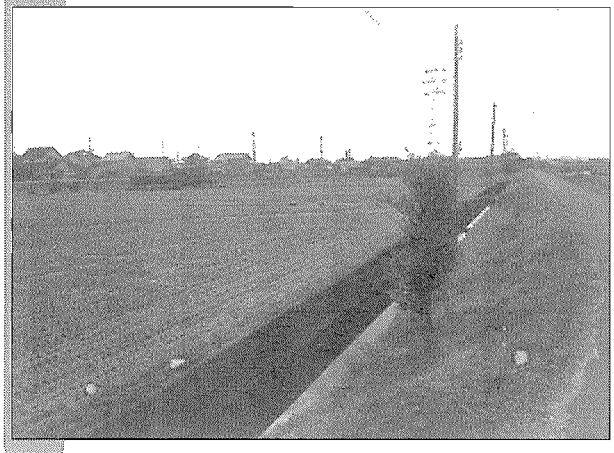
厚東川堤上に避難した市民

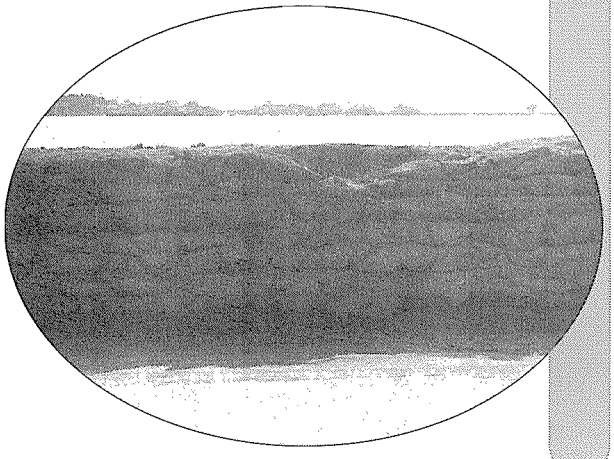


厚南産業道路（190号線）仮締切工事

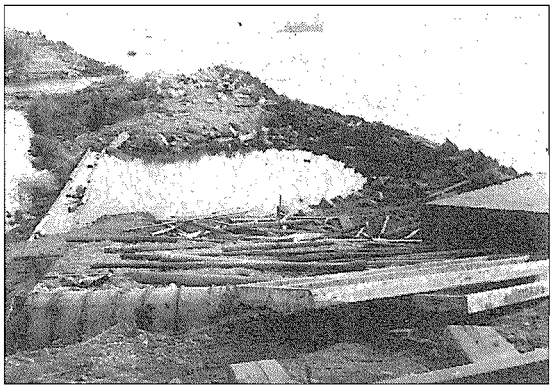


産業道路（190号線）仮堤防より満水の沖を望む



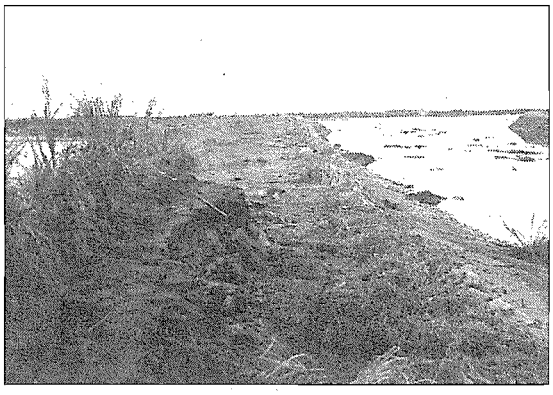


当時の映像

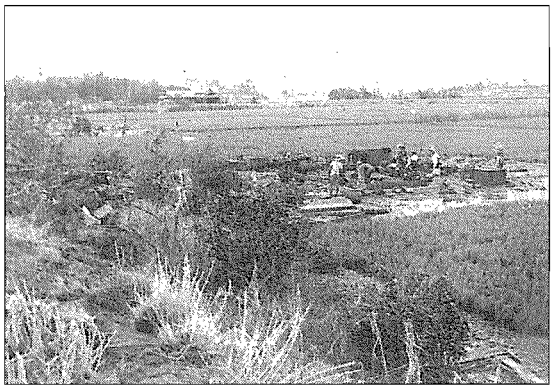


厚東川　工場堤防

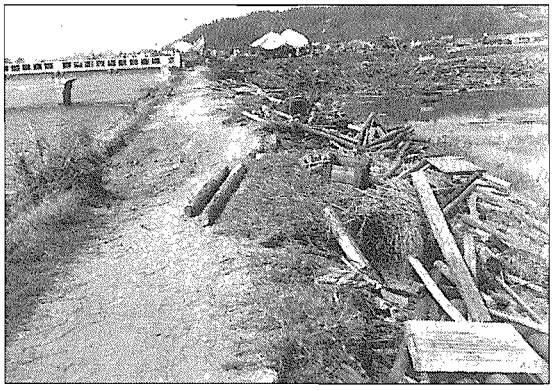
厚南南部の堤防決壊



梅田川尻の惨状



流出した住居跡（塩屋台付近）



厚東川大橋東岸（居能側堤防）

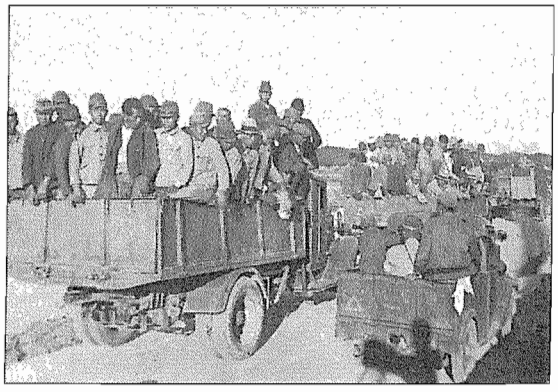
自治会員の復興奉仕作業

罹災児童慰問（藤山国民学校）

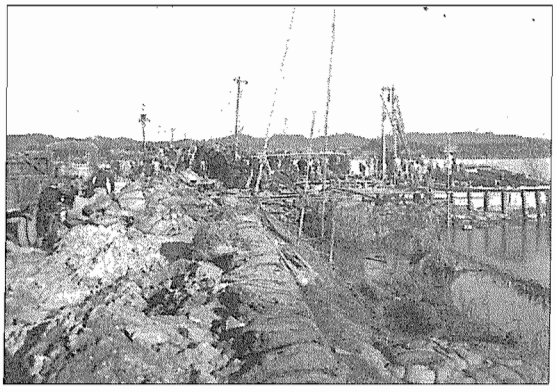
各地より暖かい同情の贈り物の山

犠牲者の収容作業

厚東川大橋西詰宇部市警防団詰所



復旧活動に出発する旧制中学校生徒



産業道路（190号線）樋門潮上完成

自主防災会結成に向けて

自主防災会の結成へ

黒石校区では、平成十五年度に自治会連合会、コミュニティ推進協議会、社会福祉協議会を中心に広く参加を呼びかけ、多くの校区民の参加のもと、みんなで創るふるさと黒石「21ゆめプラン黒石」を策定した。ともすれば人間関係が希薄になりがちな現代社会において、「相互扶助のできるまちを創りましょう」を合言葉に、相互扶助・共助のできるまち、隣の人の顔が見えるまちづくりを目指して多種多様なプランづくりを進め、地域コミュニティの活発化を図っている。

このような中で、平成十七年から、まちづくり学級「せいふてぃねっと黒石」において、地域のみんなで助け合う地域防災の取り組みについて、研究・検討を重ねてきたところである。一年目の平成十七年には、災害体験として、山口県消防学校において地震・煙・緊急脱出などの訓練や、消防署職員による緊急蘇生術等の研修に参加し、翌年には、自分たちの住む地域を見回り、危険箇所等の把握を行っている。こうした活動を通じて、自主防災会設立の機運が高まり、三年目にあたる平成十九年八月二十六日には、黒石校区を単位とした自主防災会を設立することができた。

平成十七年度　まちづくり学級をベースとして個人個人が防災意識を高める研修

一般公募・各自治会、各種団体に呼びかける

八月　防災とは　近年の宇部市の災害状況

体験学習　山口県消防学校にて体験研修（地震・煙・緊急脱出）

九月　救急学習　心臓マッサージと人工呼吸（宇部市西消防署）

十月　町をまわって　危険箇所の発見と非常食を作ってみよう

安全マップ作り　マップの持つ意味「講演会」

十二月　救急対応　怪我の応急処置（宇部市西消防署）

一月　先進地に学ぶ　自主防災会設立に向けて他校区の組織の学習

平成十八年度　まちづくり学級をベースとして校区全体の防災の方向性を学ぶ
（ＮＰＯ法人防災ネットワークの協力を得て水害を中心とした防災）

十二月　防災とは　浸水マップ作成

一月　校区内調査　校区内を調査・写真撮影

ジオラマを学ぶ　ジオラマ作成に向けて

二月　防災マップ作成　写真を貼る・避難場所を書き込む

災害図上訓練　防災マップをもとに話し合う

三月　成果発表　今後の自主防災会立ち上げについて

平成十九年度　まちづくり学級と並行した形で具体的な組織の確立を図る

六月　自主防災員の公募（自治会及び各種団体）

第一回自主防災結成準備会

自主防災委員　各自治会及び各種団体から　四十八名（男性三十九名　女性九名）

（1）自主防災会組織・規約の検討

（2）結成までのスケジュール

（3）防災訓練について

七月　浸水線表示電柱などの検討

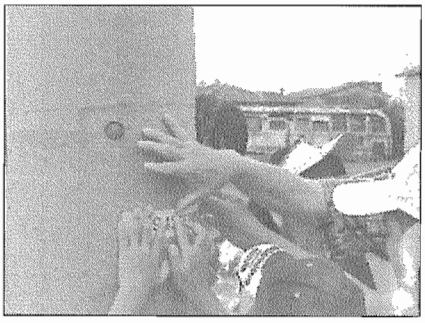
浸水線の測量・仮マーキング

八月　地域の子ども達（小学生）と共同で浸水線マーキング

自主防災会結成式及び防災訓練

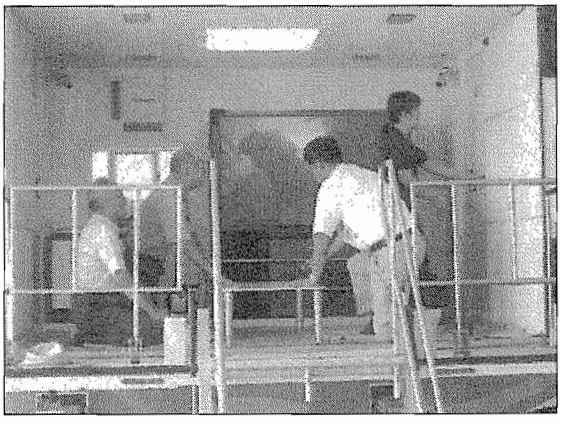
校区内から　約三百五十名参加　宇部市防災課・自衛隊・消防署員の参加

着衣泳体験・倒壊家屋救出訓練（自衛隊・宇部市消防署合同訓練）



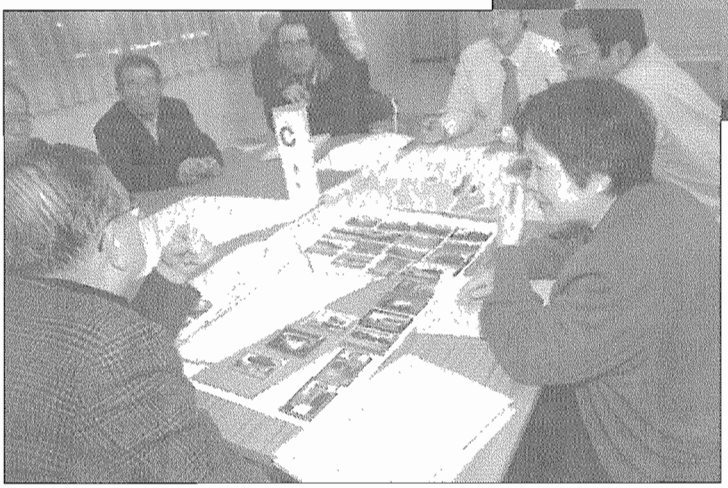
平成17年度まちづくり学級『せいふていねっと黒石』

月　日	曜	時　　間	学　習　内　容	講師／体験場所
8月　4日	木	19:00 ～ 21:00	開講式 防災とネットワーク	宇部市防災課 弘　中　秀　治
8月 25日	木	9:00 ～14 :00	学ぼう安心・安全 地震・火災時の煙の体験	山口県消防学校
9月 14日	水	19:00 ～ 21:00	さー困ったぞ（Ⅰ） そのときあなたは（人工呼吸）	宇部西消防署
10月　2日	日	9:00 ～14 :00	まちをまわって危険箇所の発見 …非常食を食べてみよう…	
10月 27日	木	19:00 ～ 21:00	安全マップづくり 安全マップの持つ意義	宇部フロンティア大学 石　田　路　子
12月　8日	木	19:00 ～ 21:00	さー困ったぞ（Ⅱ） そのときあなたは （怪我の応急処置）	宇部西消防署
1月 19日	木	19:00 ～ 21:00	先進地に学ぶ 校区でできること	厚南校区自主防災会
2月　9日	木	19:00 ～ 21:00	安心・安全これからの黒石 閉講式	

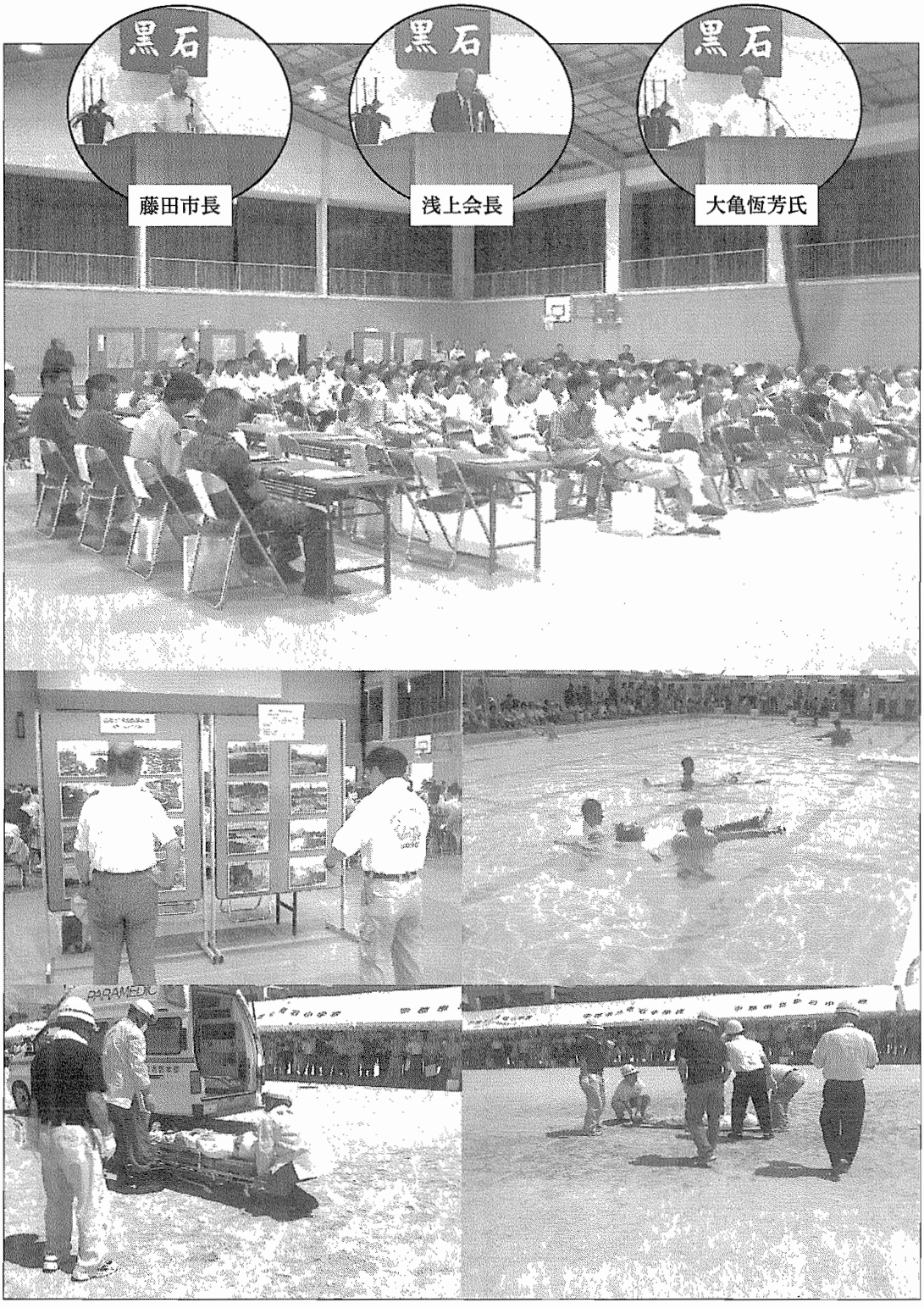


平成18年度まちづくり学級『せいふていねっと黒石』

月　日	曜	時　　間	学　習　内　容	講師／体験場所
12月 19日	火	19:00 ～ 21:00	開講式 浸水マップ（ハザードマップ）作成	山口大学工学部 三 浦 房 紀
1月 13日	土	9:00 ～	校区内調査（フィールドワーク） 校区内を調査・写真撮影	自主研修
1月 29日	月	19:00 ～ 21:00	ジオラマってなーに そのときあなたは（人工呼吸）	うりぼうクラブ 代表 志 賀 光 法
2月　5日	月	19:00 ～ 21:00	ハザードマップに写真を貼る 地図に避難所等を書き込む	山口大学工学部 瀧 本 浩 一
2月 19日	月	19:00 ～ 21:00	防災マップをもとに話し合う	〃
3月　5日	月	19:00 ～ 21:00	黒石自主防災組織について 閉講式	山口大学工学部 三 浦 房 紀



自主防災会結成式



黒石校区自主防災会結成式及び防災訓練次第

日時：8月26日（日）　7:30～12:30
場所：黒石小学校体育館・グランド

自主防災会結成式及び防災訓練スケジュール

時間	内　　容	場所
7:30	大雨・洪水・暴風・波浪・高潮警報・及び水防警報が発表	
	防災課から関係課への連絡及び指示	
	琴川橋陸間の閉鎖（河川水路課）～【想定のみ】	
	河川の水位のパトロール実施（河川水路課）	
	危険ため池パトロール実施（耕地課）	
	土砂災害危険箇所パトロール実施（土木港湾課）	
	自主防災本部を黒石ふれあいセンターに設置	
	自主防災会長・副会長及び本部員招集	
8:00	防災課から黒石校区に避難勧告が発表される	
	広報（訓練開始・避難勧告）（広報公聴課・警察署・消防団）	
	危険箇所パトロール（消防団）	
	静止画像転送紹介（山口県赤十字アマチュア無線奉仕団）	
	交通立哨開始（地域住民・警察）	
	黒石小学校避難所開設（社会福祉課・避難場所従事者）	
	自主防災本部よりブロック長（1・2・3）に情報伝達	
	ブロック長から各自治会に伝達・自治会長から自治会員に連絡	
	本部より各班（救護・物資・食料・施設）に情報伝達	
	※避難訓練開始（200～250名）	
	避難勧告を受けた地域住民は、助け合いながら避難するとともに、 避難場所・避難経路の確認を行いながら避難場所（体育館）へ集結	
	施設班・救護班は避難者の受け入れやパトロール等の応急対策を実施する	
	避難者の確認（自主防災課・避難場所従事者）	
8:50	全員避難完了（黒石小学校体育館）	

時間	内　　容	場所
9:00	黒石校区自主防災会結成式式次第（黒石小学校体育館）	体育館
	(1) 開会のことば	
	(2) 主催者あいさつ（自主防災会長）	
	(3) 来賓あいさつ	
	藤田市長　利重消防長	
	(4) 来賓紹介	
	二木県議　山下市議　黒石中学校校長　黒石小学校校長他	
	(5) メディア紹介	
	「記録した周防灘台風」宇部フロンティア大学	
	(6) 結成宣言	
	(7) 閉会のことば	
9:30	講演「周防灘台風を語る」	
	講師　厚南郷土史研究会　事務局長　大亀恆芳氏	
10:00	洪水ハザードマップ説明会（防災課・河川水路課）	体育館
10:30	着衣泳指導（ラッコ隊・地域住民）、水難救助訓練（消防本部）	プール
11:30	倒壊家屋救出訓練（自衛隊・消防本部・地域住民）	グランド
12:00	閉会式（自衛隊・消防本部・消防団・地域住民）	
	炊き出し試食体験（自衛隊・自主防災会食料班）	体育館

その他

9:00~	展示　車両・資機材（陸上自衛隊）	グランド
	給水車（ガス水道事業部）　バイク（山口RB）	

あとがき

「避難した厚東川の堤防の上で、まんじりともせず不安な一夜が明けた。昼前頃、救援のおにぎりとタクワンが届いた。とにかく嬉しかった。人の好意のありがたさが身に沁みた。」と自主防災会の結成式でしばし絶句された。六十五年前の強烈な印象を語られた大亀さんでした。平成十九年度防災教育チャレンジプランに採用され、六十五年前に宇部地方を襲った周防灘台風の記憶を風化させてはならないと「わすれまいぞ周防灘台風」を記録誌として作成することにした。生々しい体験談の掲載とビジュアルな冊子を作成し、多くの校区の皆さんに閲覧していただき語り継がれ、また、平穏な現在にいざという時の警鐘になればと思います。体験談については幸い十五年前に発刊された「厚南大風水害の思い出」に掲載された黒石在住で現存の方に快く転載の許可をいただいた上に、改めて原文に加除までしていただいた。本当にありがたく、かつまた六十五年前の風水害によって得た悲惨な体験を語り継ぎたい。また、記録として残したいとの思いの強烈さに頭が下がり、これからの人生を生きていく黒石校区の人々への貴重な遺産として残ることと思う。

当時の記録された写真が宇部市立図書館に保存されていた。当時の写真をもとに当時と今を対比させたいと企画したのであるが、当然のことであるが六十五年前の場所を特定することは困難であった。当時の体験者にも集まっていただき場所をご教示していただきましたが、面としては特定できても点の特定は困難であった。若干の対比はできたが大多数は当時の写真を掲載するにとどまったのであるが、悲惨な状況が少しでも伝われば思う。

なお、黒石校区自主防災会結成に伴い、先に配布された「宇部市厚東川洪水避難地図」「宇部市中川洪水避難地図」をもとに、自治会毎に避難場所や浸水域を黒石校区ホームページでも確認できるようにするなど防災に対する関心を高めるように努めた。

最後に、体験記の再掲載にご同意いただいた上に原文の加除までしていただいた方、当時の写真との対比にたいして貴重なご意見、また、写真撮影にご同行いただいた方、資料提供にご協力戴いた関係者に深く感謝いたします。

――ながも――

資料提供

○厚南大風水害の思い出
　　＝五十回忌追悼記念誌＝

○水防意識普及啓発事業記念誌

○宇部市立図書館附設資料館

○宇部市　総務部　防災課

○宇部市　土木建築部　河川水路課

○山口県　宇部土木建築事務所　企画調査室

わすれまいぞ　周防灘台風
―自主防災会結成記念誌―

平成19年12月　編集
平成20年1月　発行
発行　黒石校区コミュニティ推進協議会
　　黒石校区自主防災会
　　会長　浅　上　梧　朗
印刷　宇　部　印　刷